

方墳についての二・三の断想

山本 三郎

1. はじめに

古墳の基本形は、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳の四種類である。

都出比呂志氏は、古墳時代終末期を除いての4世紀、5世紀、6世紀を通じて、この四型式の中では、方墳がいつも劣位のランキング（都出1992）であると位置づけた。

方墳の研究については長い歴史がある。方墳研究には主墳と従属墳という概念（平良1992）が付き纏う。

それは、方墳が大王墓とも目される巨大な前方後円墳や地域の王墓とも目される大規模な前方後円墳の陪塚に採用される主要な墳形であることに基因しているからであろう。

方墳を研究すれば、次に向かうべき主題は陪塚論に至るのである。

西川宏氏がその代表的な研究者であり、すでに50年前に「方墳の性格と諸問題」（西川1959）という論稿をものにされ、その2年後に「陪塚論序説」（西川1961）を論述されている。学生時代に感銘をもって読み終えた記憶がある。

西川氏が方墳論をまとめられたとき「資料として集計しえた211基」の方墳を分析の対象とされている。現在、全国の方形原理の墳墓を集成することは、個人はもちろんひとつの組織・機関をもってしても不可能な作業であろう。『前方後円墳集成』を纏められたときの手法や「埋蔵文化財研究会」などの全国的組織で行うのがよいであろう。

西川氏が方墳論を発表された当時は方形周溝墓という学術用語さえもまだ成立していなかった時代である。当時、発掘調査された方墳はきわめて少なかった。現在では、大阪市・長原遺跡というひとつ遺跡の発掘調査された方墳の数は、200基を超えているのであり、小形方墳の埋没古墳ではあるが、滋賀県守山市・服部遺跡では、弥生時代中期ではあるが、360基を超える方形周溝墓群が発掘調査されている。

山田幸弘氏が作成された「陪塚変遷図」（山田1997）はよくできた内容であり、ここから方墳という古墳の性格の一面がうかびあがってくる。方墳の視点からみれば、わが国の最も大型古墳群である古市古墳群や百舌鳥古墳群の性格の違いが読み取れそうである。

今回扱う播磨地域においては、是川長氏が「播磨地方の方形墳について」（是川1972）でこの地域の方墳のことをまとめられている。そのとき、分析の対象とされたのは20基である。その後、現在までにその数十倍の古墳時代の方形墳が発掘調査されている。

この「方墳についての二・三の断想」という小論を書こうと思い至った契機は、是川氏が播磨地域の方形墳をまとめられるきっかけとなった三木市吉川町・有安古墳の確認調査を行い、当考古博物館の研究紀要に、その行政資料である「実績報告書」を掲載しようと思い至ったことから始まっている。

発掘調査された播磨地域の方形墳を中心に検討を行い、その歴史的意義の二・三の断想について想いを馳せてみたい。

前述したなかでも、方墳と方形墳という用語を使用している。前方後円墳・前方後方墳・円墳との

関連で呼称を選択するとすれば、方墳と使用すべきである。しかし、古墳時代前期には長方形を呈するものが以外と多い。長方形墳と呼ばれることもしばしばである。この小論ではこの呼称の件は整理せず、直観にたよって使い分けをしていることを容赦願いたい。弥生時代の墳墓は長方形が基本であるが、周溝墓の圧倒的多数は長方形であるが方形周溝墓と呼称されている。

長方形墳の長幅比を調べていると、方形と長方形の視覚的な差は1:1.3以内（以下の長幅比の記述では1を除外している）のところであり、1.3以内であれば方形墳と呼称してもそれほど違和感はない。このあたりで方形墳と長方形墳の境界が引けそうである。このことはもっと多くの方墳あるいは方形墓の統計のもとで行う必要があるが、将来の研究に委ねたい。

古墳時代の方墳のわが国最大の規模は、奈良県・榊山古墳で、一辺の規模は96mであり、中期古墳と理解されている。そして、3番目は、浄元寺山古墳（一辺70m）で、和田編年6期の墓山古墳の陪塚と評価されている。

2番目は千葉県・竜角寺岩倉古墳で、古墳時代終末期の古墳である。畿内地域の古墳時代終末期の最大の方墳は伝用明陵と伝承される春日向山古墳（63×60m）である。2番目は伝推古陵の山田高塚古墳（63×56m）である。方墳は古墳時代終末期に最大の画期（平良1992）があり、この時期の大形方墳は畿内に多いのである。

今回、検討する播磨地域最大の方墳は姫路市・山ノ越古墳（一辺50m）である。次の規模とは大きく懸け離れて、次の規模は20m代である。2番目は西脇市・岡ノ山1号墳が長辺23mの規模である。弥生時代後期のボラ山2号墓が長辺約26m、短辺10mの長方形墓である。

方形墓、墳丘墓、台状墓は弥生時代の墳墓の呼称であり、方墳・方形墳は古墳時代の墳墓の呼称として使用している。

古墳時代の時期区分は前期、中期、後期、終末期の編年を用い、その小期の細分については和田晴吾氏の古墳編年（和田1987）に準じている。弥生時代後期・終末期の墳墓も扱う。終末期は庄内式併行期と捉えている。

2. 古墳出現期前後の方形墳墓をめぐって－加古川流域を中心に－

加古川流域には、長大型の竪穴式石室と把握してもよい埋葬施設をもつ中小規模の方形墳の調査が比較的多く行われている。加古川上中流域では、西脇市滝ノ上20号墳、丹波市丸山2号墳、多可郡多可町岡ノ山1号墳である。加古川下流域では加古川市成福寺2号墳がある。

畿内地域^(註1)の古墳時代前期においては、長大型の竪穴式石室は圧倒的に100mクラス以上の前方後円（方）墳に採用される埋葬施設である。それに比して古墳時代前半期の加古川流域には方形墳にも多く採用されていることは特異な状況であると言える。

これらの古墳を検討することによって、古墳時代前期の方形墳の抱えている問題を析出していきたいと思考している。

定型化した前方後円墳の成立と長大型竪穴式石室の出現と三角縁神獣鏡の副葬の開始が、古墳出現の最大のメルクマールであり、古墳時代の開始を告げる考古学的事実と認識している。

加古川流域の古墳時代は方形墳から始まる現象が指摘できそうである。

加古川は日本列島の中では最も標高の低い分水嶺を通じて日本海と瀬戸内海をつなぐ交通の要衝の地である。かつて、佐原真氏が「石剣の道」（佐原1970）と呼ばれた弥生時代以来の内陸交通の基幹

道路であるという長い歴史をもつ。まさに「歴史の道」あることを加古川・由良川流域で起こる様々な考古学的な事象が存在するのである。

この流域で起こったそのひとつの考古学的事象（種定1989）として、滝ノ上20号墳を検討することによって、この小論を始めていきたい。

(1) 最古級の方形墳の滝ノ上20号墳の検討

加古川流域の古墳の出現は方形墳から始まる可能性が高い。その古墳は西脇市・滝ノ上20号墳である。報告書（岸本2003）では、古墳時代前期後半にその築造時期を位置づけている。

しかし、竪穴式石室の構造、鼓形器台の相対年代、副葬品の組合せをみても、古墳時代前期前半に比定できる。中でもその出現期の築造（和田編年1期）と捉えられることである。この項では、そのことを検証していきたい。

① 滝ノ上20号墳の再検討

滝ノ上20号墳は加古川市中流域左岸に発達する河岸段丘に立地する方形墳である。その墳丘規模は、一辺16m、高さ1.7m^(註1)であり、形態は長方形を呈さず比較的整った方形である。墳丘の周囲には周濠や周溝を構築した痕跡は確認されなかった。墳丘斜面には、大きめの扁平な川原石を「縦使いして斜面に貼り付け基底石」（広瀬2008）とし、明確な裏込めは用いずに、基底石より小ぶりの河原石を小口積みする形態であり、整った設置技術の葺石を採用している。日本海の山陰地域を中心に発展する貼石より一歩進んだ外部施設が読み取れる。

埋葬施設は墳丘中央に長大型の竪穴式石室の範疇と捉えてもよい竪穴式石室1基が築かれていた。この竪穴式石室は特異な構造をもつものであった。その特異な構造とは、第1に、四壁には扁平な亜角礫（川原石）を使用し、第2に、北短側壁側に板石を用いた室を設けている箱式石棺状の副室を設けていること、また、第3に、棺床施設に棺側石と小円礫（川原石）を使用した礫棺床を採用していることにある。

副室を除いた石室の残存長は3.7m、幅は0.7～0.45m、南小口で高さ0.68mである。

第2の副室構造は、古墳時代前期前半の最古級の前方後方墳のひとつである神戸市・西求女古墳と通じる構造であり、第3の棺側石と礫棺床は出雲地域の礫棺床をもつ竪穴式石室に通じる構造である。出雲地域の中では、棺側石や礫棺床の構造は安来市・造山3号墳に近い形態を示している。

この竪穴式石室は不幸な状況下の発見^(註3)であり、調査開始時には「箱式石棺状の副室」は取り除かれており、写真が記録に遺されてのみであるが、報告に掲載されている写真等を参考に、竪穴式石室の構築順を復元的に検討しながら、この特異な石室の構造を少し詳しくみていきたい。

この石室の基底部の構造については、「床面は礫石を二重に敷きつめ、上面には朱が塗られていた。横断面は浅いU字形を呈する。」と報告書では記載されているのみであり、墓壇の有無やその形態まで調査が及んでいず、その記載はない。

報告書の写真5には墓壇の上端面らしき色違いが窺え、写真6（上）では墓壇底を読み採ることが可能であり、掘削墓壇（和田晴吾1989）の存在を認めてよいであろう。墓壇底は平坦な形態か墓壇底中央に基台を造り出す構造なのかはいまひとつ明確ではないが、後者の可能性が高いと読みとれなくはない。後者であれば、たつの市・権現山51号墳に類似した低い基台であろう。

低い基台上の墓壇底に棺床の小礫石（川原石）よりさらに小ぶりの砂利を数回の工程に分けて敷設

し、砂利層の上に扁平な垂角礫を置き棺側石としている。おおむね棺側石の上段と棺側石と墓壇壁との間に敷き詰められ砂利層は同レベルである。その結果、横断面U字形の底部構造を形作る。この底部構造の上に小礫石（川原石）を敷きつめ、棺側石とともに棺床としている。これが古墳時代前期の長大型堅穴式石室に採用される「粘土棺床」の機能をはたしている。

棺側石と石室壁体基礎の構築関係をみていく。基本的に石室壁体基礎は砂利層上にあり、棺側石が壁体基礎石よりも先に置かれていることは報告書の写真6（上）から読みとれるのである。しかし、写真6（下）では、西側壁の基礎石が先に積まれ、棺側石が後に置かれて状態が写っており、また、南小口には棺側石が置かれず、南小口壁の最下段は扁平な川原石を立て、その上に扁平な川原石を小口積みしている状況が窺える。このことを底部構築と納棺の時期及び壁体構築と副室構築の関係をどう捉えて整合性ある解釈を導き出すのか困難な状況ではあるが、棺床の高低差をキーポイントにして次のように理解してはと考えている。すなわち、副室四壁の板石の設置と南小口壁基礎の立石と南側の両側壁の基礎石一・二段をほぼ同時に構築しているのではないかという解釈である。写真6（下）では南小口壁の立石と接する西側壁には棺側石はなく、南小口の立石と同じ高さにするまで二段目までの扁平な川原石が積み上げられている状態が写っているからである。

滝ノ上20号墳の堅穴式石室に使用された各部の石材の種類の特徴をみれば、箱形石棺状の副質には板状石材（板石）の割石を、天井石には扁平な不揃いの板状石材の割石を使用している。四壁の壁体と棺側石には扁平な垂角礫（加古川流域の川原石よいのであるが、割石を確保してきた場所の沢石の可能性も考えておく必要がある。）を採集してきて使用している。そして底部構造に使用している礫床には小円礫を使用し、この小円礫は川原石である。

副室と天井石の岩質は流紋岩質凝灰岩である。

主室の副葬品は、副室のある北側に集中して硬玉製勾玉1、碧玉製管玉2、コバルトブルーのガラス小玉27、鉄刀1鉄槍（鉄剣）1、銅鏃1が出土した。石室幅の広狭関係やこの副葬品の配置から北頭位に埋葬されていたと捉えている。副室からは舶載内行花文鏡1、銅鏃6、鉄鏃8、鉄鋏先1、鉄刀状片1が出土している。副室内の出土状況の記録はなく、その出土状態は不明である。舶載内行花文鏡は面径15.1cm前後の中型鏡であり、鏡縁は著しく摩滅しており、鈕孔内も紐ずれのあとが顕著で、鈕も片ずれしており、懸垂して使用されていたとみられる。1世紀中ごろから後半の漢鏡5期（岡村1999）の舶載鏡であり、長い使用が想定される。

(2) 滝ノ上20号墳以前の加古川流域の方形墓

滝ノ上20号墳の系譜あるいは系統が奈辺にあるかを検証するために、滝ノ上20号墳築造以前の加古川流域の弥生時代後期から終末期の墳丘墓の実態を検討していきたい。

加古川上流域の丘陵上に築きつづけられたボラ山墳墓群の調査は、丹後地域と播磨地域の系統の関係を考える上できわめて重要な成果をあげている。

まずは、ボラ山墳墓群を検討することから、この節のねらいを明らかにしていきたいと想う。

①ボラ山墳墓群（丹波市青垣町）

ボラ山墳墓群（青垣町・氷上郡教委1995）のことについて「タニワ（兵庫）の長刀と墳墓」（山本2008）の中で述べたことがある。加古川流域の方形墓という視点から再度検討してみたい。

ボラ山墳墓群は弥生時代後期前半から終末期後半にかけて営まれた弥生墳墓群である。この墳墓群

は加古川上流域の西岸にある独立丘陵上に立地し、14基の墳丘墓で構成されている。墳墓群はその築造位置等から三群に分けて捉えるのがいいであろう。独立丘陵の南尾根の1・2号墓をa群と、北側の3～9号墓をb群と、そして、西斜面に位置する6～9号墓の4基をb-1群、5～3号墓をb-2群と細分し、中央の尾根斜面の11～14号墓の4基をc群と仮称して内容をみていきたい。

墓域の築成手法をみれば、a群は尾根に直交に溝状の掘り割りで成形し、方形あるいは長方形の区画を設ける丁寧な築成である。築造時期を検討すれば、1号墓は終末期前半で、2号墓は確認調査のみで、時期は不明であるが、長辺約26m、短辺10mのきわめて細長い形態を呈し、丹後地域の奈具1～3号墓や日吉ヶ丘遺跡SZ01の弥生時代中期後半に盛行し、後期前半には衰退に向かう長方形貼石墓の規模や平面形態に近く、ボラ山墳墓群で最初に築造された有力な首長の墳丘墓である可能性が高い。

1号墓の墓壇の規模の大きさ、鉄斧、大型の鉄鎌、鉄鉋の鉄器副葬の多さから、この墳墓群の中では、a群は有力な首長層達の墓域と把握できる。b群の築造は古く、後期前半を中心とする時期の築造である。c群は後期後半から終末期後半の築造であり、c群の14号墓は箱形石棺2基と土器棺を埋葬施設にもち、土器棺の時期からボラ山墳墓群の最後の築造と捉えられる。そして、14号墓のみが箱形石棺を採用しており、それまでの埋葬施設はすべて木棺直葬である。土器の特徴や墳墓様式や鉄器副葬などをみても、ボラ山墳墓群は丹後地域の強い影響のもとで築造された墳墓群であると捉えていいであろう。

ボラ山14号墓 ボラ山墳墓群を構成する中では、14号墓が後述する加古川中流域の方形墓に影響を与える、あるいは、連動する方形墓として注目される。

ボラ山14号墓は、その立地、その墳丘の築成手法、そして埋葬施設の種類からいってもボラ山墳墓群の中では、きわめて特異な様相をもつ墳丘墓である。そして、ボラ山墳墓群の中では最後の築造であり、このボラ山14号墓をもってボラ山墳墓群は終焉を迎えるのである。そして古墳時代前期の古墳はこのボラ山の丘陵には築かれていない。このボラ山に次に古墳が築かれるのは、古墳時代後期のボラ山1号墳である。

特異な様相のひとつは、ボラ山14号墓の立地がボラ山墳墓群の中では、唯一丘陵尾根状ではなく、谷状地形に築造されているということである。ふたつ目は墳丘の築成が、コ字形に掘られた周溝（幅0.6mほどである）の存在であり、地山成形を行った上に明瞭な盛土を行っていることである。三番目の特異な様相は、ボラ山14号墓がこの墳墓群では唯一箱形石棺を採用していることである。

ボラ山14号墓の規模は、報告書では、8.0m×5.0mの長方形と記述されているだけであるが、墳形図を計測すれば、墳頂平坦面は長辺（東西辺）約8.2m、短辺（南北辺）約4.2mに復原できる。その長幅比は1.92と長方形の範疇である。そして墳丘の基底の規模は、墳丘土層断面図の盛土の範囲を根拠にすれば、長辺約8.0m、短辺約7.0mに復原できる。その長幅比は1.1であり、ほぼ方形の範疇と捉えられる方形墳丘墓である。墳丘基底といっても、谷状地形に築造されているから、その上方の北側と南側ではその比高差が約3.0mもあり、墳丘規模の割には比高差が大きい。

埋葬施設は、箱形石棺2基と土器棺1基が検出されている。2基の箱形石棺は、長辺に対して併行関係で、縦列に配置されている。土器棺は第2主体部の箱形石棺の墓壇を切って造られており、追葬的であるが、この両者は血縁関係を有した関係であり、当初から子供が早死したときは、こういう配置をするという約束事のもとに埋葬されたものであろう。そういう意味では計画的な埋葬と言える。成人2と未成人1という組合せの複数埋葬のあり方は明石川流域の弥生時代後期後半から古墳時代初

頭にはよく見られるひとつの類型である。

第1主体部の箱形石棺の内法の規模は、長さ0.7m、幅0.3m、高さ0.3mであり、小形石棺（清家2001）のタイプと言える。第2主体部のそれは、長さ1.6m、幅0.3m、高さ0.3mであり、基準タイプの石棺である。小形石棺の構造をみれば、小形石棺の方が丁寧な構造であり、長側石は一枚タイプのものであり、四辺の構造は2枚を組み合わせた構造であり、天井の構造も天井石の上に、さらに板石を覆っている。しかし、副葬品はない。

基準の石棺である第2主体部は、長側石が複数タイプ（清家2001）^{註4}であり、その構造は、第1主体部と比べると粗雑な観はいがめない。ただ、天井部の二重構造は第1主体部の構造と同じである。

両者とも「ロ字形」タイプの箱形石棺である。

清家氏の「長側石1枚タイプ」が「複数タイプ」よりより上位の階層の石棺であることと合わないが、このタイプが基準の石棺に適用される論理であり、子供（未成人）の小形石棺には別の視点の導入が必要^{註5}なのであろう。

両石棺とも、「無底タイプ」の石棺であり、棺底には砂質系のシルトを棺床している。

土器棺の土器様式からこの墳丘墓は、弥生時代終末期中頃の築造と捉えていいであろう。

ボラ山1号墓 ボラ山1号墓は、前述したボラ山14号墓よりも先行する弥生時代終末期の台状墓である。この1号墓は主尾根に築かれたボラ山墳墓群a群に属し、ボラ山2号墓とともにこの墳墓群のリーダー的存在の墳墓である。もって回った言い方をしてきたが、ボラ山2号墓→ボラ山1号墓→ボラ山14号墓が、この小地域を教導、支配してきた首長の墳丘墓である。

ボラ山1号墓は、長辺（東西辺）11.2m、短辺（南北辺）10.3mであり、その長幅比をみれば、1.1であり、ほぼ方形墓に近いと言える。墳丘の築成は、長辺と直交するかたちで、すなわち、主尾根の東と西に溝を掘ることによって墳丘基底を明確にするという築成手法を採用している。

埋葬施設は南北の堀割り溝と直交するかたちで、2基の木棺墓が並列して築かれており、それらと南側で、斜行する関係で第3主体部の土壙墓が築かれている。

第1主体部の墓壙の規模は、長さ3.45m、幅2.1m、深さは深く1.1mである。木棺の規模は、長さ1.94m、幅0.59mで、木棺形式は箱形木棺と報告されている。第2主体部もおなじように記せば、墓壙の規模は、長さ3.1m、幅1.52m、深さは1.0mと深い。木棺の規模は、長さ1.98m、幅0.52mで、箱形木棺と報告されている。

しかし、両者の報告書の木棺実測図をみれば、丹後地域に盛行する舟底形木棺（石崎2000）の可能性も十分に看取されるところである。それは、丹後地域の墳丘墓と同様に墓壙が深いことであり、第1主体部からは袋状鉄斧1、鉄鉋1が、第2主体部からは大型の扁平な柳葉形の鉄鏃1、鉄鉋1、丹後地域に特有な小形で、きわめて短い鉄剣1が副葬されており、弥生時代終末期の首長墓に、鉄器を普遍的に副葬するのは丹後地域や但馬地域の特質であり、加古川下流域やのちの畿内地域にはみられない習俗である。また、両主体部とも墓壙内破碎土器供献と呼称される儀礼が実修されていることである。また、堀割り溝や埋葬施設から出土する土器は、弥生時代終末期の丹後・但馬系土器群と同様式の地域的特徴をもつということである。

多くの要素が、丹後地域の墳丘墓と同じ特徴を有し、その影響下がきわめて強い条件下で築造されていることが窺い知れる。このことから木棺形式が舟底形木棺の可能性が高いことが傍証していると捉えている。

②周遍寺山墳墓群（加西市）

周遍寺山墳墓群は加古川中流域にある墳丘墓である。加古川の支流の万願寺川の右岸にある独立丘陵上に立地する。墳墓群は標高約70mの丘陵頂部の比較的平坦なところに、ほぼ同形同大の3基の方形墳丘墓が築かれている。

昭和33年に発掘調査されたのは、東側に位置する第1号墓である。墳丘の規模は、四辺の基底に施された列石によって、長辺（東西辺）約9.5m、短辺（南北辺）約6.0m^{（註6）}で、その長幅比が1.58であり、長方形を呈していると判断できる。列石は貼石状に施工されているとみられ、四辺とも各隅部に向かって弧状に外反して、その隅部が突出している形状を示している。この形態を捉えて、調査者が古墳時代の「中期的要素がのこる後期古墳」とされていた周遍寺山1号墓を、石野博信氏は山陰地域に発達する四隅突出墓の範疇の墳墓であると指摘（石野1985）されて、再注目されるようになった。

墳丘上には2基の箱形石棺が検出されている。墳丘中央にある中央石棺は、長辺と併行する関係で構築されており、その規模は長さ1.70m、幅0.34m、深さ0.24mで基準系の石棺規模である。この石棺は丁寧につくられており、扁平な板状石材5石からなる蓋石に「良質で青白色の粘土」による被覆が施されている。中央石棺の長側石は、北側で3石、南側で2石が使用されており、長側石複数タイプの石棺である。底石をもたず、無底石タイプである。が、その棺床施設は「棺底には厚さ5cmほどの粘土で固めた上バラスを敷く」という丁寧な構造であった。棺底粘土の構成をみれば、「粘土、朱、粘土、朱と重な」っていたという、古墳時代前期の長大型竪穴式石室の粘土棺床の施工手法とも通じる儀礼行為を行って構築されたとみられとも言えるかも知れない。側石にも朱彩がなされていた。

中央石棺からは、人骨が二体検出された。「一体は中央に伸展されていたが、他の一体は南側西方の板石2枚を10cmばかり掘り上げ中央の伸展された遺体の脚部との隙間に片寄せてあった」と報告されている。この記述から一棺重葬である新しく葬られた遺体は東頭位であったことが判る。副葬品は鉄刀子1、管玉1が検出されている。

その後、この二体の遺体の歯間計測を行った清家章氏は、この二名の被葬者は血縁関係を有する可能性を示すと指摘（清家2001）されている。そして、この二体の被葬者は熟年女性と熟年男性であるとも報告されている。

もうひとつの石棺である西石棺は、中央石棺の西側に位置し、その配置関係は、ほぼ直角の関係である。しかし、中央石棺が調査当時の墳頂から深さ0.5mところにあるのに対して、西石棺は調査前に露出していた石棺であり、計画的な埋葬というよりも追葬のと把握の方が適切な調査成果である。

この西石棺の規模は、長さ1.58m、幅0.3m、深さ0.2mで、基準タイプの規模の石棺である。長側石は東西側石とも3石で構成され、中央石棺と同じく複数タイプで、底石をもたない無底石タイプである。石棺の構造は中央石棺より「粗雑」で、棺床も「山土を固めた」だけで粘土や小円礫を敷く棺床施設は採用されていない。そして、副葬品は何ら検出されていない。

西石棺からは伸展葬された一体の人骨が遺存しており、清家氏によると壮年後半の女性であり、中央石棺の二人の被葬者とは血縁関係にある可能性がきわめて高いと指摘されている。

③舟木南山墳墓（小野市）

加古川の支流の東条川流域の段丘面に立地する。調査時点で三方が造成により大きく削平を受けているという状況下の調査であったが、東側と北側に葺石状の施設が確認されたこととその他の状況を加味して、一辺約14mの方形墓と復原されている。

墳丘上には3基の埋葬施設が確認されている。箱形石棺2基と木棺直葬1基である。第1主体は長さ1.4m、幅0.4m、高さ0.3mである。東長側石3枚、西長側石5枚を使用する長側石複数タイプである。副葬品はなく、北頭位である。砂岩系の地元で「池田石」と通称される石材を使用している。第2主体は木棺直葬で墓壇の規模は長さ2.5m、幅0.6mである。床面には砂利が敷かれていた。第3主体は小型の箱形石棺で、長さ0.7m、幅0.2m、高さ0.25mであり、四壁とも1枚石を使用していた。床面には礫を敷いていた。

年代については検討する材料が少ないが、調査者は墳丘の北東と南東隅がやや張り出し気味であること、葺石状のなかに貼り石状の部分があることなどから、四隅突出墳丘墓の可能性を指摘している。

岸本直文氏（岸本1997）は弥生墳丘墓とする根拠はなく、古墳時代のものとするのが無難であろうと評価しており、立花聡氏（立花2001）は四隅突出墳丘墓ととらえることは否定的であるが、墳丘上面や墳丘土中から出土した土器が弥生時代後期後半としている。岸本氏はこの土器を攪乱土から出土したもので根拠にならないと捉えている。

確かに墳丘中央に埋葬施設がなく、不思議な配置であるが、方形墓の複数埋葬のあり方から弥生墳丘墓の可能性を追求してみたいところである。

④経ヶ芝墳墓（西脇市）

加古川の支流の野間川流域の丘陵尾根端に立地している。墳丘は尾根筋あたる南北両辺を溝状の掘り割りで成形している。墳丘斜面には基底から約1m程度葺石が遺存していた。墳丘裾には30～40cmの大形の割石を据え、上方に小形の割石を乱雑にしているのみで、葺き方に規則性はない。

墳丘の規模は11.3×10.4mの規模の方形墳丘墓である。経ヶ芝古墳と報告されているが、弥生墳丘墓の可能性が高いと捉えている。

埋葬施設は墳丘中央に並列した2基の箱形石棺が検出され、南北に主軸を置いている。墳丘の築成以前に地山に墓壇を掘削し箱形石棺を設置している。墳丘盛土は埋葬後に行われている。2棺は同時埋葬と捉えられる。両石棺とも付近に産出する流紋岩質角礫凝灰岩を使用している。

第1主体の長辺のみが二段墓壇で、長さ2.5m、幅1.6mであり、箱形石棺は長さ1.57m、幅は北端で0.44m、南端で0.31m、深さ0.2mである。床には黄赤色粘質土が敷かれていた。南短側石と蓋石の内面に赤色顔料が塗布されていた。蓋石には白色粘土で被覆されるが、被覆粘土の上にさらに石材を置くという不思議な構造である。両長側石は比較的整った石材を3枚ずつ使用している。

第2主体の箱形石棺は長さ1.45m、幅は北端で0.38m、南端で0.35m、深さ0.27mであり、棺底には小礫の混じった赤黄色粘質土が敷かれていた。頭部側に3個の自然石が置かれ、その周囲に赤色顔料が認められ、石枕的に使用されたものであろう。長側石は西側が3枚、東側が2枚を使用しているが、東側の1枚はきわめて長いものである。蓋石には白色粘土で被覆されていた

両石棺からは副葬品はなく、墳丘からも遺物が出土していず、時期を決める根拠がないが、方形墓と複数の箱形石棺をもつあり方から弥生時代の墳丘墓と捉えたいところである。

⑤堀山3号墓（加西市）

加古川の支流の万願寺川流域の段丘面に立地する。西約350mの位置に周遍寺山墳墓群があり、堀山3号墓に東接して弥生時代終末期の方形周溝墓が検出されている堀山遺跡があるという環境のなかに堀山3号墓がある。

墳丘は長辺8.5m、短辺7.5mの方形墓である。

墳丘中央に並列した2基の箱形石棺があり、主軸は東西方向である。

第1主体の石棺は長さ1.8m、幅は東端で0.4m、西端0.25mで、東頭位である。北長側石は3枚、南長側石は4枚を使用している。長側石複数タイプの箱形石棺である。蓋石には灰白色粘土で被覆されていた。石棺内から二体分の人骨片が検出されており、30歳前後の男性と壮年の男性と鑑定されている。

第2主体の箱形石棺は長さ1.7m、幅は東端で0.37m、西端で0.34mである。両長側石は4枚を使用されている。棺内東端には自然石の石枕が置かれ、伸展葬の人骨が良好に遺存していた。20歳前後の男性である。棺内北東隅に鉄刀子1点が副葬されていた。経ヶ芝墳墓ときわめて類似した内容を有するが両者とも時期を決定できる遺物は出土していない。

⑥内場山墳丘墓（篠山市）

加古川の支流の篠山川流域の丘陵上に立地する。篠山盆地の西部に位置する。

この墳丘墓については、「タニワ（兵庫）の長刀と墳墓」（山本2008）で詳細に検討した。詳細はその論稿に譲るとして要点のみを記述する。

墳丘の規模は、21.6×19.5mであり、明確な墳頂平坦面は18.5×14.2mであり、その長幅比は基底部で1.11、墳頂平坦面で1.3である。墳頂平坦面には10基の埋葬施設築かれている。この10基の埋葬施設は当初から計画された配置であり、首長階層の生前の姿態を表現しているものとみられる。その内訳は大形の木棺墓6基（SX9～14）、小形の木棺墓（SX15）、そして、土器棺3基（2号～4号土器棺）である。中心埋葬はSX10でこの被葬者が築造の契機となったと捉えている。複数の埋葬施設のあり方は「中心埋葬重複周辺埋葬」（野島・野々口1999・2000）と呼称される形態である。

大形の木棺墓6基すべてが組合式木棺と報告されているが、中心埋葬SX10と周辺埋葬SX9とSX11は丹後地域の後期後半以降の王墓の棺として発達する舟底形木棺を採用している形態を示している。

注目される副葬品は、中心埋葬SX10から出土している。なかでも、全長93.5cmの素環頭太刀は弥生時代のものでは最大級の秀品で舶載品であろう。鉄鏃と同形式の鑿頭式鉄鏃が17本副葬されていた。古墳の副葬品の思想に通じる同種多量副葬の例である。この現象はすでに丹後地域の弥生時代後期後半の大風呂南1号墓の中心埋葬第1主体にも認められ、内場山墳丘墓の中心埋葬にも引継がれた思想である。

築造時期は出土した土器から弥生時代終末期（庄内式期）後半である。

⑦ずえが谷遺跡（篠山市）

内場山墳丘墓と至近距離にある、ずえが谷遺跡から弥生時代後期末～終末期前半の方形周溝墓が調査されている。周溝墓群は深い解析谷によって削られた細長い尾根上の先端に立地している。眼下には篠山川が流れている。

周溝墓群は一辺5～7mほどの小規模な方形周溝墓7基で構成されている。7基の周溝墓から15基の木棺直葬墓が確認されている。各周溝墓から1～4基の木棺直葬の埋葬施設があり、複数埋葬が基本である。木棺の形態は舟底形木棺10基、箱形木棺5基である。その内、7基の舟底形木棺にはそれぞれ1点のみであるが、鉄器（鉈6点、鉄鏃1点）が副葬されており、舟底形木棺の方が優位な棺形態と認められる。そして、舟底形木棺の主軸は南北方向を採り、箱形木棺は東西方向を採るという法則性が認められた。

⑧小結

滝ノ上20号墳の系統を捉えたい目的で、加古川中・上流域の滝ノ上20号墳以前に築造されたとみら

れる弥生時代後期から終末期の墳丘墓を検討してきたが、その目的は達せられなかった。

しかし、複数の箱形石棺をもつ方形墳丘墓という類型と丹後地域の影響下にある舟底形木棺をもつ可能性高い墳丘墓がこの流域に存在していることが判ってきた。前者は加古川中流域に発達する類型で、舟木南山墳丘墓、周遍寺山1号墳丘墓、経ヶ芝墳丘墓、堀山3号墳丘墓であり、加古川上流域ではあるがボラ山14号墳丘墓である。後者は加古川上流域のボラ山1号墳丘墓であり、加古川流域の支流である篠山流域の内場山墳丘墓、ずえが谷遺跡の方形周溝墓である。

複数の箱形石棺をもつ方形墓の中で、時期を決められる土器が出土しているのはボラ山14号墓のみである。他に、周遍寺山1号墓はその墳形の特徴が、出雲地域の塩津山墳丘墓と類似しており、四隅突出墓の系譜をひくとすれば、弥生時代終末期に位置づけられる根拠をもつことになる。

経ヶ芝、堀山3号、舟木南山の諸例は箱形石棺を複数もつ方形墓として、牽制付会的に報告者の意志に反して、弥生時代終末期の墳丘墓として記述してきたが、古墳時代前期に下がる可能性が大きいところがなくもない。

それは複数の箱形石棺の配置のあり方であり、弥生時代終末期中頃のボラ山14号墓は墳丘の長辺に平行に縦列の配置であり、周遍寺山1号墓は本来的には墳丘中央に1基の箱形石棺を配置している手法とみられ、もうひとつの箱形石棺は追葬的に捉えられる。それに比べて、経ヶ芝墳丘墓と堀山3号墳丘墓は中央に並列的に配置していることにある。とくに、経ヶ芝墳丘墓の箱形石棺の石材の使用法はより後出的と捉えられるところにある。ここではとりあえず、弥生墳丘墓として捉えておき、今後の批判に耐えたいと思う。

内場山墳丘墓は丹後地域の政治勢力の南進として捉え、丹後地域の大風呂1・2号墳丘墓→赤坂今井墳丘墓の王墓の直系的な系譜を引く王墓の可能性が高いと理解（山本2008）している墳丘墓である。

(3) 滝ノ上20号墳以降の加古川流域の方形墳

播磨地域において、滝ノ上20号墳と同じく、礫床をもつ竪穴式石室を埋葬施設とする方形墳は加古川流域には確認されていない。

流域が異なるが、揖保川流域において、方形墳で礫床をもつ竪穴式石室を埋葬施設とする古墳の存在が知られている。たつの市御津町・権現山9号墳である。

滝ノ上20号墳との関連でタイトルとあっていないが、ここで権現山9号墳の記述から始めることを許容願いたい。

そして、その後、加古川流域で長大型の竪穴式石室をもつ方形墳を検討していくこととしたい。

①権現山9号墳（たつの市御津町）

権現山9号墳は標高130mの丘陵頂から西方に延びる尾根稜線上に立地する。墳丘規模は丘陵先端側の南と西側に遺存している列石によって推測でき、長辺約15m、短辺約9mの方形墳というより長方形墳で表現したほうが適切な形態をしている。墳丘の長幅比は1.7を示す。

墳高は平野部を眺望できる南側が高く基底からは約2.0mを測り、尾根側の基底からは僅か0.3mを測るにすぎない。肉眼的な観察では低墳丘の古墳との印象がある。この古墳は墳丘基底のレベルを整えるというよりも、その平面形態を整えることに築造の重点をおいているといえる。

埋葬施設は墳丘中央に竪穴式石室1基が築かれ、石室の主軸は墳丘長軸と一致している。石室の四壁は扁平な割石を使用しているが、壁面はそれほど整っていない、整備な竪穴式石室といえるもので

はない。石室長は約4.8mと推定でき、石室幅は狭く、北端で0.68m、中央で0.61mを測る。高さは0.66mである。

石室底には小礫を敷き重ね礫床が造られている。礫床は緩やかな弧状を呈し、割竹形木棺が納置されたと推測できる。礫床の北端は立ち上らず、この部分すなわち北小口に接して細長い粘土帯が確認でき、この粘土帯は木棺の小口部をおさえる役割を担っていたのであろう。粘土帯と礫床上端の高さは同じレベルである。小礫には赤色顔料が付着していた。

出土遺物は面径5.6cmの珠文鏡1面のみである。

権現山9号墳が滝ノ上20号墳との関係で築造されたとは考え難い状況である。それでは、この古墳はどこから伝播してきたのであろう。考えられるのは、出雲地域のこの種のタイプの方形墳が、生野峠のルートを通じて但馬地域を介して伝わってきたと考えるのが妥当なところであろう。

なお、権現山9号墳は権現山古墳群を構成するひとつである。権現山古墳群は揖保川下流域の右岸の権現山、梶山山塊に計114基以上の古墳が知られている。古墳の大半は横穴式石室を埋葬施設とする小円墳であるが、三角縁神獣鏡と特殊壺・特殊器台型土器が伴出した51号墳（前方後方墳、墳長52m）などが知られている。

②岡ノ山1号墳（多可郡多可町）

墳形は長辺23.0m、西側短辺が短く約18.0m、東側短辺は西側より長く約22.0mといういびつな形態の方形墳である。墳形図をみれば、一見、東隅角が突出しているような形態が窺われ、いびつな形態とともにみれば、出雲型方形墳的にも捉えられることの可能な要素が読み取れるが、明確でない。

列石形態の石組みが西側短辺の一部に検出さえている。

墳頂平坦面には4基の埋葬施設が築かれており、計画的な埋葬配置と捉えられる。

岡ノ山1号墳の複数埋葬のあり方をみれば、墳頂平坦面中央に中心埋葬の第4主体部がまず最初に築かれ、中心埋葬の墓壙を共有するような切り合い関係を有し、第3・2主体部が構築されている。第1主体部は前記の3基の埋葬施設とは墓壙の切り合い関係はなく、それとは直交の関係で、その北東部に築かれている。このような配置形態は、この地域の支配階級の首長層の生前の社会的な関係が表現されているとみるのが妥当であろう。

このような複数埋葬のあり方をみれば、丹後地域の弥生時代後期から終末期の複数埋葬のあり方（野島永氏の共時的埋葬配置）に淵源があるとみるのが妥当であろう。

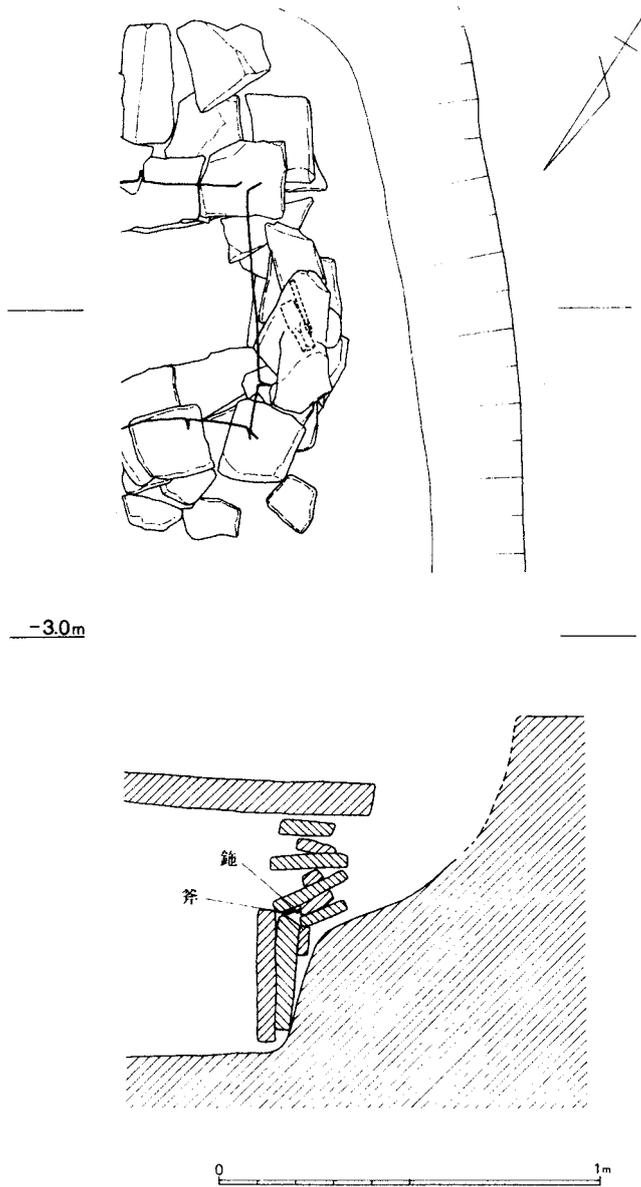
構築順は切り合い関係と竪穴式石室の構造から、第4主体部→第3主体部→第2主体部→第1主体部と順次構築されていると把握してまず間違いないであろう。ただし、追葬的なものではなく、当初から計画的な配置関係のもとで同世代のなかの短期の時間差と捉えられる。

なお、第4主体部の上部で土器供献儀礼が行われており、土器のほか鉄鏃が共伴していることは興味深い。なお、接して築かれている2号墳との間の掘割り溝があり、その区画溝からも底部穿孔の壺形土器が出土している。

4基の埋葬施設はすべて竪穴式石室で、中心埋葬の第1主体部の竪穴式石室が最も長大で、その長さ5.2mで、幅は北端で0.85m、南端で0.5mであり、石室床面の高低差はないが、まず北頭位とみてよいであろう。第3・2主体部の竪穴式石室も同じ傾向が指摘でき、北頭位と捉えてよいであろう。

③丸山2号墳（氷上市山南町）

丸山2号墳は、加古川と篠山川の合流点に形成された狭隘な沖積地を望む独立丘陵上に築かれた丹



第1図 丸山2号墳・南西小口壁 副葬品出土状態

波市丸山古墳群を構成するひとつの方形墳である。

丸山2号墳の墳丘は、旧地形を成形することなく、旧表土上に盛土することによって墳丘を整えているのみであり、葺石や埴輪樹立による墳裾を明確にする外部表象（施設）は施行されていない。そのため墳丘規模を正確に示すことはできないところではあるが、墳形図や墳丘に入れたトレンチ調査の成果から、長辺（南北辺）約18m、短辺（東西辺）約16mの方形墳と捉えられる。長幅比は1.16：1である

埋葬施設は墳丘部中央に長辺と併行した竪穴式石室が1基築かれている。

墓壙の規模が大きく、上面平面形は長方形を呈し、規模は長さ約5.5m、幅2.75mである。墓壙は内側にカーブを画きながら、途中でわずかな段部をもち壙底に達する。さらに壙底中央部を一段深く断面U字形に掘り窪め、このU字形部分に良質な黄色土を置き、棺床を形成している。このような墓壙の形状を含めた基底部の構造は、粘土槨によくみられる構造であり、粘土槨特有の型式（都出1981）と把握されている。竪穴式石室の基底部構造の類型

化のなかでは、都出氏がSC型式（都出1981）と分類したものであり、筆者のE2型式（山本1922）の範疇に入るが、副葬品から古墳時代中期と捉えられる丸山2号墳の系譜については後述する。

竪穴式石室の構築にあたっては、棺床に割竹形木棺を置き、木棺の両小口の外側に板石を立てる。この段階で身体埋葬に伴う重要な儀礼を行う。そのことは南西小口壁部で、立石と小口壁体間に、棺外副葬品として検出された鉄鉈1・袋状鉄斧1が物語っている（第1図）。身体埋葬に伴う儀礼行為が完了した後に石室の構築が始まる。

石室の構築まず側壁から行う。壙底面上に大型の板石を立石的に置き側壁最下段としている。その目的は両小口の立石と高さをそろえることにある。その後に扁平な板石を7～8段垂直近くに積み上げる。天井石は大型の扁平な不定形な板石を架構する。天井石の接する間隙に壁体の板石と同大の板石を目塞ぎとして置いている。天井石上には粘土による被覆はなく、墓壙内に直接土を埋め戻し埋葬行為を終えている。

その結果、石室の規模は、内法で長さ400cm、幅64cmと狭く、長幅比（都出1986）6.25で長大型竪穴式石室の範疇の中にある。

副葬品は石室中央部が盗掘されていたとはいえ、少なく、棺内からは碧玉製管玉2が出土したのみである。棺外には、副葬する時点を異にするが、2カ所で確認された。ひとつは、前述した壁体構築以前の頭位側にあたる小口部分である。もうひとつは、壁体構築後の肩部の左側に鉄鍬先1、ミニチュアの鉄鎌1が検出された。

この丸山2号墳から提起される課題は、まず、この古墳がなぜ方形墳であり、前方後円墳ではないかということである。もうひとつ、埋葬施設が粘土槨ではなく、竪穴式石室であるかということである。このふたつの問題の歴史的意義は不可分の要素をもって展開している事柄である。

前者の課題からその解を探っていきたい。丸山古墳群は加古川と篠山川の合流点付近に生産基盤をおく政治的集団の首長層の墳墓地であることは了解されるはずである。その時期の始まりは、丸山1号墳が破壊した丸山墳墓群からこの独立丘陵に首長墓が造り続けられている。時期は弥生時代後期前半（木棺墓1-3の時期）である。出土土器から弥生時代終末期の庄内期に続いていることは、氷上市内場山墳丘墓と同じ讃岐産大型複合口縁壺形土器の出土によって知ることができる。この土器は讃岐地域から播磨地域にかけての弥生時代終末期の棺として多用される土器（岸本道昭1996）である。

なんといっても、この古墳群の画期は丸山1号墳の築造である。

丸山1号墳は墳長48mの前方後円墳である。後円部径24m、前方部長24m、前方部幅24m、くびれ部幅11mという見事な設計図の基につくられた前方後円墳である。西晋尺（1尺24cm）を使用していると捉えて間違いのないであろう。この数値をみれば、梶国男氏が畿内地域の前方後円墳の設計は、中国西晋時代の24cm／1尺が最もよく適合していると指摘されたことみごとに一致する。丸山1号墳はそのことを全うされた前方後円墳といえることができる。近藤喬一氏も、山城平尾城山古墳の後円部の企画性から、晋尺24cm／1尺が使用された可能性が高いことを指摘されている。

後円部墳頂平坦面には、2基の畿内様式の長大型の竪穴式石室が築かれ、前方部には地域的な特徴を有する箱式石棺状の竪穴式石室を築き、兆域とも把握してよい墳丘裾平坦面にも7基もの埋葬施設をもつ前方後円墳である。複数埋葬という視点（山本1983）からこの古墳をみれば、初期倭政権の地域支配の理想の形が表現されていると捉えられなくもない。地域を支配する頂点は、中央から派遣されたヒコヒメ制に基づいた後円部2基の畿内様式の竪穴式石室を採用した埋葬施設をもつ被葬者といえるであろう。実質的な支配は前方部に埋葬された被葬者が担い、それを支えるのは墳裾平坦面に埋葬された同族という姿である。この古墳に埋葬された被葬者はすべて支配階層である。そこに支配階級の階層差が埋葬位置・埋葬施設の構造の差、副葬品の差として表現されている。あたかも、陪塚の萌芽形態とも先行形態ともいえるかもしれない。

④成福寺2号墳（加古川市八幡町上西条）

成福寺古墳群は2基の円墳と2基の方墳からなる古墳群である。そのうち、2号墳のみが調査されている。

成福寺2号墳は一辺約10mの方墳である。埋葬施設は墳丘中央に竪穴式石室1基が築かれている。石室の遺存状態はよくない。墓壇の形態は壇底中央をU字形に掘り込む型式で、U字形掘り込みに割竹形木棺を置き、棚状部から石室壁体を積み上げる石室である。石室は長さ3.5m、幅0.6m、深さ0.5mと推定されている。石室からは鉄剣が出土したのみである。明確な築造年代はあきらかでないが前

期末から中期前半の築造と考えられている。

⑤小結

加古川中流域は長大型の竪穴式石室を埋葬施設とする方形墳が多い地域である。この組合せのタイプを加古川型方形墳という類型で捉えたいと思考している。

このタイプの方形墳は出雲地域で盛行するが、近畿地域では稀少である。特に畿内地域の前期古墳では、長大型竪穴式石室は100mを超える前方後円(方)墳に採用される埋葬施設である。

加古川類型の方形墳の規模は大きいとはいえない。岡ノ山1号墳が23×20m、丸山2号墳は18×16m、滝ノ上20号墳は一辺16m、成福寺2号墳は一辺10mという規模である。揖保川流域の権現山9号墳は15×9mである。

それに、比して出雲地域のこのタイプの方形墳の規模をみれば、安来市・大成古墳は一辺60mもあり、同市・造山1号墳が60×50m、同市・造山3号墳は38×30m、島根県加茂町・神原神社古墳が29×25mという規模である。

加古川類型の方形墳である岡ノ山1号墳、丸山2号墳、そして権現山9号墳の平面形状は長方形を指向していると捉えられる。出雲地域の傾向と同じである。

それに比べて、この類型の加古川流域では最初の築造である滝ノ上20号墳はその指向性は方形であり、このタイプの新しくみられる成福寺2号墳も方形である。

この類型の竪穴式石室の構造をみれば、滝ノ上20号墳が特異であり、古式である。出雲地域の影響下の竪穴式石室として捉えたいのだが、副室構造をもつ竪穴式石室の淵源がきらかでない。西求女塚古墳か丹後地域の王墓にその系統をみたいのであるが、丹後地域では副室構造をもつ竪穴式石室は知られていない。今後の課題であろう。

滝ノ上20号墳の築造もこの地域では大きな変革といえるのであるが、その後の丸山1号墳の出現は、それ以上の大きな政治的ショックをこの地域に与えたであろう。

そのことが、この地域の伝統的な方形墳と竪穴式石室を組み合わせることによって、典型的な加古川型方形墳が成立したのであろう。その埋葬施設の構造は、二段墓壙を呈し、墓壙底をU字形に掘り込み、その上段から竪穴式石室を構築するという手法の採用である。古墳時代前期後半あるいは末に成立し、中期前半まで続く構造である。

3. 明石川流域の古墳時代前期の方形墳をめぐって

明石川流域は、20mを超えない古墳時代前期と捉えられる方形墳が比較的多く築造されている地域である。古墳時代中・後期に至ってもこの規模を超える方形墳は築造されていない地域でもある。

この流域で、最古の古墳である可能性が高い神戸市西区・天王山4号墳は、長辺19.0m、短辺16.0mで長方形墳という用語を使用してもよい古墳であるが、墳形図や調査中の現地を見学した直観からすれば、方形墳と呼称してもなんら問題がないという印象である。今回、明石川流域を対象とした6基の方形墳の長幅比をみれば、基本的に1.3以内であり、この1.3という長幅比が、方形墳と長方形墳という呼称の境界として設定していいのであろうと思考していることは前述している。

明石川流域の方形墳の埋葬施設のあり方を検討すれば、割竹形木棺を直葬するものがほとんどであり、後述するが、この組合せを明石型方形墳として類型化できる可能性が高いところである。

この地域の古墳時代全般の墳形を通覧すれば、明石型方形墳以降、円形原理の墳形が圧倒的に優勢

な地域である。墳長60mの前方後円墳である白水薬師山古墳であり、五色塚古墳群も前方後円墳と円墳から成る古墳群で、播磨地域最大の前方後円墳である五色塚古墳（墳長194m、総長208m以上）、播磨地域最大の円墳である小壺古墳（径67m）、歌敷山東古墳（円墳）、歌敷山西古墳（円墳）は円形原理に基づいて造られた古墳である。その後も明石川流域は圧倒的に円形原理の古墳の築造が続いているのである。古墳時代終末期の方形墳の存在も明確でない地域である。

実例を検討することによって、明石型方形墳を検証していきたい。

①天王山4号墳（神戸市西区）

天王山4号墳は天王山古墳群を構成する古墳のひとつである。

天王山古墳群は明石川の支流である伊川中流域の西方の標高約78mの低い丘陵上に立地し、いわば里山的なところに築かれている古墳群である。谷をへだてた西側の丘陵頂部に白水薬師山古墳が存在する。

この古墳群は前期古墳2基、後期古墳5基の計7基の古墳からなっている。前期の4・5号墳は、2基とも方形墳である。後期の5基のうち、6号墳は一辺約8mの方形墳で、2基の箱形木棺（長さ2.3mと1.8m）が調査されている。3号墳は墳長25mの2段築成の帆立貝式古墳で、円筒埴輪、形象埴輪（盾、家、馬、人物）、須恵器などが出土している。ほかの3基は小規模な円墳である。

天王山4号墳は長辺（南北）約19.0m、短辺約16.0mのやや長方形の墳丘で、その長幅比は1.19で、高さは調査時で約2.7mであった。しかし、埋葬施設が表土直下から検出されたことなどから、墳丘流失がかなりあったとみられ、築造時の高さは約3.3mあったのではと推定されている。墳丘の形成は、下方の約1.0mは地山を削り出して成形し、それより上部は盛土によって墳丘を形作っている。葺石や列石は採用されていない。

墳頂に南北約8.0m、東西約5.0mの平坦面を形成し、そこに長大な割竹形木棺直葬2基と土器棺1基の複数の埋葬施設が確認された。

東側の第1号棺は長さ約4.5m、棺中央に碧玉製管玉2個とガラス小玉5個の一群があり、木棺南端に鉄刀1、鉄鉈1、鉄鋏先1が、北端に鉄斧1、鉄刀子1が副葬されていた。

西側の第2号棺は長さ5.4m、棺中央に歯が一体分遺存し、その東側に舶載八禽鏡1（面径9.6cmの小形鏡）、歯の周辺には碧玉製管玉5、ガラス小玉16、北端に鉄鉈2、鉄鋏先1が副葬されていた。

墳頂平坦面の東北隅、第1号棺の東北にあたる墳頂平坦面の東北隅に、二重口縁の壺形土器に鉢形土器を被せた土器棺が検出された。また、東側の墳丘斜面に完形の手焙形土器が土坑の中に埋置されていた。また、南側の墳丘斜面には焼土の入った土坑も検出されている。

墳丘の斜面や裾部から墳頂の埋葬施設で行った捉えられる供献土器が出土しており、時期は布留期とみてよいであろう。

②堅田神社境内1号墳（神戸市西区）

堅田神社境内1号墳は明石川中流域左岸の丘陵先端に築かれた古墳時代前期の方形墳である。その規模は長辺（南北）約18.0m、短辺（東西）約14.0mで、その長幅比は1.28を示す。墳丘には1.0mほどの厚さの盛土が確認されているが、天王山4号墳と同じく葺石や列石は施されていない。

墳頂平坦面には併行に配置された3基の埋葬施設が検出された。そのうち、第1・2主体部は長大な割竹形木棺を採用されており、第1主体部の長さ5.45mという明石川流域ではこの時期最大級の割竹形木棺である。第2主体部は長さ4.9mである。この2基の埋葬施設には小円礫を使用した排水施

設が施され、第1主体部の排水溝は墓壙を超えて墳丘に延びている。第2主体部の排水施設は、第1主体部の墳丘へ延びる排水溝にバイパスのように取り付け共有している。この排水施設の取付けの仕口から第1主体部が先に造られたことが判る。

第3主体部は短い小形の箱形木棺である。(天王山4号墳の土器棺と同じ性格を有するのであろう)

第1主体部からは鉄剣1振り、第2主体部からは小形鏡、鉄剣、鉄鉈、碧玉製管玉が出土している。墳丘裾からは供献土器として使用されたとみられる二重口縁壺形土器片が出土している。

③天王山5号墳(神戸市西区)

天王山5号墳は一辺約20m、高さ約2.0mの古墳時代前期の方形墳である。

墳頂平坦面には4基の埋葬施設が検出されている。そのうち中央棺・北棺・南棺は併行に配置された割竹形木棺直葬の埋葬施設であり、この3基の埋葬施設と直交に配置されていたのが東棺の組合式石棺の埋葬施設である。

その規模と副葬品をみれば、中央棺が長さ5.2m、最大幅0.6mで、鉄剣1が副葬されていた。北棺は割竹形木棺とするには疑問も提出されているが、長さ4.2m以上、最大幅0.5mで、針状鉄器1、ガラス小玉6が副葬されていた。南棺は長さ4.2m以上、最大幅0.5mでガラス小玉3が副葬されていた。

東棺の底石をもつ組合式石棺は、長さ2.7mで、最大幅0.6mであり、副葬品は不明である。

なお、墳丘からは小型丸底の土器が検出されている。

④西神ニュータウン内第55号地点遺跡(神戸市西区)

西神ニュータウン内第55号地点遺跡は明石川中流域左岸の標高60~80mの丘陵尾根上に築造された古墳群である。3基の古墳から成り、3基とも調査されたが、1・3号墳は墳丘の流失が著しく、埋葬施設はほとんど遺存していなかった。

3号墳は長辺16.5m、短辺13.5mの方形墳で、その長幅比は1.22である。墳丘は削平が著しく、埋葬施設は墓壙の下部を検出したのみで、その規模は長さ3.4m、幅1.1mであり、木棺直葬とみられるが、木棺形式は不明である。遺物は出土せず、時期は確定できないが、古墳時代中期と推定されている。

2号墳も土取りや封土の流失等による攪乱によって墳丘の変形が大きく、長方形の形状を示すのか、楕円形のかは明確でないが、方形墳の可能性が高いのではとみている。規模は長辺(長径)17.5m、短辺(短径)13.3mである。

墳丘中央に単数の埋葬施設が検出され、割竹形木棺直葬であった。木棺の長さ2.5m、幅0.4mで、木棺の幅が東の方が広く、床面も西に傾斜していることから東頭位と捉えられている。副葬品としては、棺内の東半に袋状鉄斧、鉄剣、鉈状鉄器が出土した。墓壙の規模は長さ3.6m、幅1.2mであり、木棺の周りに拳大以下の円礫が充填されていたことからこの割竹形木棺直葬の特徴と捉えられることができる。

1号墳は墳丘裾からTK47型式の須恵器が出土しており、後期古墳の円墳である。

⑤西神ニュータウン内第44号墳(神戸市西区)

西神ニュータウン内第44号墳も明石川中流域左岸丘陵上築かれた、一辺約8.0mの小規模な方形墳と推定されている。

墳丘中央に割竹形木棺直葬1基が調査^(註3)され、棺内から鉄鉈、棺外から鉄剣が副葬されていた。その木棺の規模は、長さ2.0m、幅0.4mと報告されている。この埋葬施設の上部から底部穿孔した二重口縁壺形土器が出土しており、前期古墳と捉えられている。

⑥小結

明石川流域の方形墳の埋葬施設の種類をみれば、加古川流域と異なり竪穴式石室を採用している古墳はなく、対象とした6基の方形墳がすべて割竹形木棺直葬の古墳であるということである。

埋葬施設のあり方をみれば、複数埋葬と単数埋葬に分かれるということが指摘できる。

複数埋葬をもつ古墳は、天王山4号墳、堅田神社境内1号墳、天王山5号墳であり、単数埋葬は西神ニュータウン内第55号地点遺跡の2基の古墳と西神ニュータウン内第44号墳である。そして、複数埋葬の割竹形木棺の長さは、4.0mを超える長大な割竹形木棺が採用されており、単数埋葬の割竹形木棺は長さ2.5mと2.0mの短小な割竹形木棺が使用されている。基本的には前者が古く、後者が新しいと捉えて間違いないであろう。

このように、方形墳と割竹形木棺直葬の組合せをもつ、明石川流域に分布がある方形墳を**明石型方形墳**と規定したい。そして、その時間的な変遷のなかで、二つの類型の存在が指摘できる。

ひとつは、天王山4号墳の複数埋葬のあり方で、この類型の典型ともいえる形態である。成人を埋葬した並列した2基の割竹形木棺直葬と子供を埋葬した土器棺の組合せである。

この類型は、弥生時代中期末の西神ニュータウン内第40号地点遺跡の2基の弥生墳丘墓にその淵源が求められる複数埋葬のあり方である。2号墓は一辺約6.0mという小規模な方形台状墓であるが、墳丘中央に長さ約1.9mと長さ2.3mの箱形木棺直葬と転用された土器棺の組合せである。その配置も天王山4号墳ときわめて類似している。2基の成人棺としての箱形木棺が並列し、2基の木棺墓とは直交関係をもつともいえる一基の箱形木棺の小口部に子供棺と土器棺を配置するというあり方である。

1号墓は一辺約9mの規模で、その墳丘中央に長さ約1.6mと長さ約2.3の成人墓としての箱形木棺直葬が並列し、それと直交する配置関係で、墓壙の長さ0.75の土坑墓が存在していた。この1号墓の土器棺を採用してないあり方は、堅田神社境内1号墳に通じる複数埋葬のあり方である。

天王山5号墳は4基の埋葬施設が計画的に配置されており、成人墓としての割竹形木棺直葬は並列しているが、その中央棺の規模が5.2m長大な割竹形木棺で、まさに中心埋葬と呼ぶに相応しい。その両側に長さ4.2m前後の割竹形木棺が寄り添うという配置形態である。そして、長さ2.7mの底石を有する組合式石棺が直交かたちで配置されている。

このような複数埋葬のあり方を示す形態を**明石型方形墳 a類**と類型化しておきたい。そして、前二者の天王山4号墳と堅田神社境内1号墳の複数埋葬のあり方からこの小首長墳の性格をみれば、弥生時代中期末の首長層ときわめて同質性といえるであろう。弥生時代の拠点集落の開発リーダーの系譜もつ有力な家族墓として成長していった小地域の支配層として捉えることができるであろうと思考している。

いいかえれば、弥生時代中期末に系譜をもつ小地域を支配する首長墓という性格と同質であると捉えることができる。弥生時代の拠点集落の指導者の延長線に発展してきた支配形態の首長という性格ということが可能であろう。それを若干発展させた小地域の首長が天王山5号墳の複数埋葬のあり方と捉えることができるであろう。

あとひとつは、短小な割竹形木棺直葬を単数で墳丘中央に配置する形態で、**明石型方形墳 b類**と仮称しておきたい。

この後、西神ニュータウン内第30号墳や西神ニュータウン内第41号地点遺跡で確認されているごとく、円墳で、単数の割竹形木棺直葬をもつ埋葬施設のあり方の古墳が継続して築造されていく。

明石型方形墳の特徴のひとつは礫石を使用した墳丘を明確に画する列石や葺石などの外部施設をもたないことにある。

もちろん明石型方形墳の段階では埴輪は採用されていない

4. 古墳時代中期の方墳をめぐって

古墳時代の方墳を通覧して場合には、中期前半と須恵器が導入されてからの中期後半のあり方は、大きく異なっていると観ざるを得ない現象が存在する。

ここでは、播磨地域の大型古墳群である玉丘古墳群と御着古墳群を主に検討する。玉丘古墳や壇場山古墳などの大形前方後円墳にとらわれすぎると、大型古墳群の関係は明確にその相異捉えがたくなるが、古墳群のなかの方墳のあり方から透視すれば、古墳群のあり方が著しく異なった風景として現出してくる。

玉丘古墳群と御着古墳群の墳形の構成がそのことを表している。玉丘古墳群は古市古墳群の縮小版とも捉えることが可能であるが、方墳の存在形態が異なる。御着古墳群は大首長墳が前方後円墳を採用しているのみであり、それ以下の現存する古墳は方墳のみであり、古墳の規模とは関係なく、長持形石棺を採用している古墳群である。

古墳時代中期の大王墓の古墳群である古市古墳群と百舌鳥古墳群の方墳のあり方をみれば、古市古墳群は前方後円墳31基、円墳30基、方墳48基、不明14基の古墳群の構成である。それに比較して、百舌鳥古墳群は前方後円墳21基、円墳20基、方墳5基、不明1基であり、方墳の数が著しく少ないということが指摘できる。

播磨地域の大型古墳群の位置やその構成をみれば、古市古墳群の縮小版が玉丘古墳群と把握したいところがあり、百舌鳥古墳群が御着古墳群と対応すると考えたいところであるが、方墳のあり方からみれば、百舌鳥古墳群の方墳の稀少さが素直にそのこと認める状況にはないと言えるかも知れない。

いずれにしても、方墳から照射すれば、古市古墳群と百舌鳥古墳群の性格が異なっていることが窺いしれるのである。

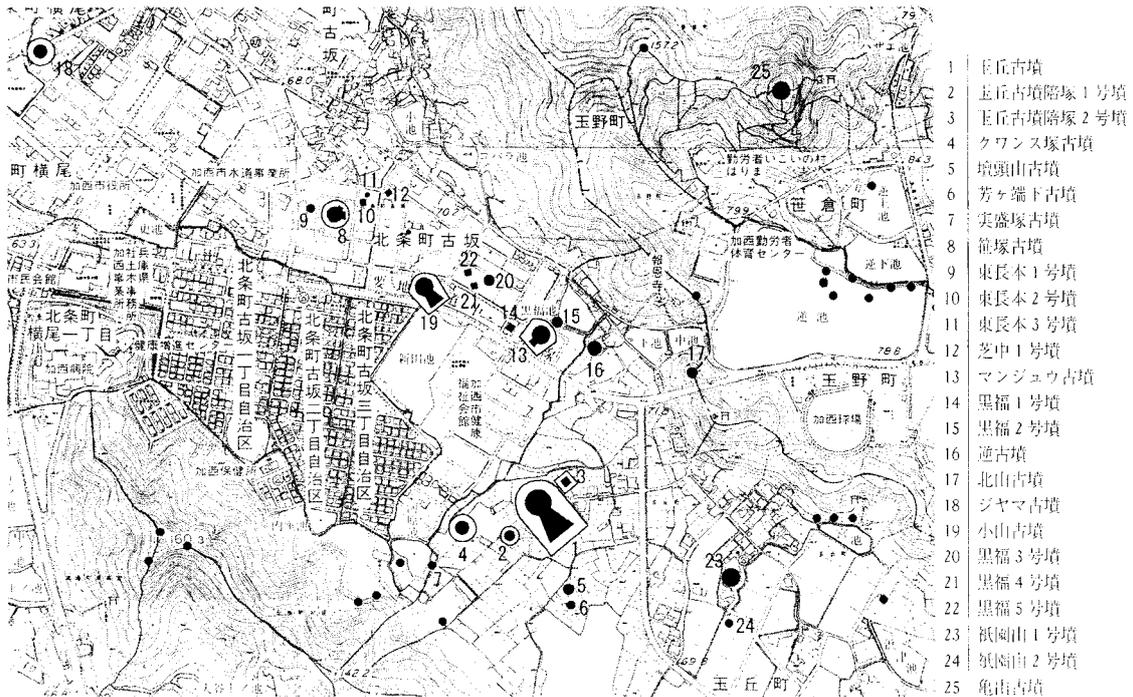
(1) 古墳時代中期の大型古墳群の中の方墳

①玉丘古墳群（加西市）

玉丘古墳を中心に典型的な中期型の方墳群を形成している播磨地域の大型古墳群である。近年の一連の発掘調査で埋没古墳等の実態も徐々に明らかになりつつある。

古墳群の範囲のおさえ方によってもその数や規模がことなるが、平地に立地している古墳を対象に狭義の方墳群と捉えても、大形前方後円墳2基、30mを超える帆立貝式古墳・大形円墳7基を数え、小規模な円墳・方墳を含めると30基を超える古墳から構成される。

玉丘古墳群は階層構成型の方墳群を形成しており、和田編年6期から9期にかけて築造されているが、総じてみれば、大首長墳のみが大形前方後円墳を採用し、有力な首長墳は複数で構成され、帆立貝式古墳や大形円墳を採用し、その下位に小形円墳、小形方墳の中小墳が置かれるというピラミッド型の構成を採っている。そして、平地に立地する古墳には階層差を超えて周濠・周溝と埴輪、葺石をもつが、小形方墳には葺石は採用されていない。規模と葺石の採用の有無から、小形墳の中でも円墳と方墳とに上下の別が看取され、小形方墳がより下位に位置する。



第2図 玉丘古墳群の分布

埋葬施設の種類も階層によって異なり、大首長墳は長持形石棺を、有力首長墳は伝統的な竪穴式石室と割竹形木棺を採用し、中小墳は木棺直葬とみられる。

知られている情報からの築造時期ごとのその構成をみれば、以下の構成が考えられる。

古墳中期前半の6期では、玉丘古墳（前方後円墳、墳長109m）、クワンス塚古墳（造り出し付円墳、墳長約35m）、壇頭山古墳（円墳、17m）、玉丘古墳陪塚第2号墳（方墳、一辺24m）、玉丘古墳陪塚第1号墳の構成である。陪塚1号墳はかつて前方後円墳とみられていたが、周囲の地形改変が著しく、現在では径25mの円墳と捉えられているが、発掘調査は行われておらず、秘かに方墳の可能性ものこされているのではみている。6期の古墳は古墳群の中では南に位置し、隣接して築かれている。築造時期の証左を示す遺物の出土はないが、築造されている位置から実盛塚古墳（円墳、21m）もこの時期と捉えていいであろう。

玉丘古墳は盾形周濠をめぐらし、周濠を含めた総長^(註7)は146mである。墳丘は三段築成で、埴輪と葺石を配し、東側くびれ部には半円形状の造り出しを設けている。後円部墳頂中央には墳丘主軸と平行に長持形石棺を直葬した埋葬施設があり、墓壙底には白色円礫が敷かれ、その上に底石を置く。石棺は底石のみをのこして他は破片になっているが、型式の特徴は把握できる。蓋石は両短辺、両長辺ともに2個の突起をもつものであり、長持形石棺としては最高ランク（和田1996）に位置づけられる型式である。蓋石上面には格子状に彫刻された文様が認められる、長持形石棺としては古式の型式である。

クワンス塚古墳の埋葬施設は割竹形木棺を納めた長さ4.0m、幅1.0mの伝統的な竪穴式石室である。墳丘北側の造り出しには埴輪による方形区画があり、加古川市・行者塚古墳の造り出しで検出されている土製供物とみられる同様な土製品、鳥形土製品、籠目形土器が出土している。

6期の確実な方墳には、玉丘古墳陪塚第2号墳のみである。他に、埋没古墳の方墳の存在の可能性

も考慮のなかに入れておく必要があるだろう。陪塚第2号墳には、幅約2mほどの浅い周溝が確認されているが、葺石は確認されていない。

7期から8期を中心とする時期の造営されている古墳は、平地では、小山古墳（前方後円墳、墳長79m）、ジャマ古墳（円墳、径53m）、マンジュウ古墳（帆立貝式古墳、墳長45m）、笹塚古墳（帆立貝式古墳、墳長43m）、黒福2号墳（円墳、径24m）、方墳としては、黒福1号墳（一辺10m）がある。丘陵上には亀山古墳（円墳、45m）が中期後半の8期の築造である。

小山古墳は玉丘古墳の北500mの地点にあり、墳丘主軸の方向は玉丘古墳とほぼ一致している。盾形周濠をめぐらし、北側くびれ部には造り出しが付設され、周濠から埴輪と初期須恵器が出土している。須恵器はTK73型式の新しいところで、古墳の築造時期は8期と捉えておきたい。加西市・山伏峠の石棺仏として再利用されている長持形石棺は、この小山古墳の棺であった可能性が高いとみている。蓋石のみがのこされ、両長辺にのみ各々2個の縄掛突起をもつ型式である

マンジュウ古墳は帆立貝式古墳で、墳長45m、周濠を含めた総長は約65mである。短い前方部の右側（東側）に方形に造り出しを付設している。埋葬施設は墳丘が大きく削平を受けており不明である。周濠から円筒埴輪、形象埴輪、須恵器が出土しており、須恵器はTK73型式である。

笹塚古墳も帆立貝式古墳で、墳長43m、周濠を含めた総長68mで、マンジュウ古墳と同じところに、短い前方部の右側に造り出しを付設している。マンジュウ古墳と笹塚古墳の墳丘形態や規模はきわめて類似しており、同一規格による築造（加西市教委2007）とみても大きな誤りはないであろう。埋葬施設は竪穴式石室で長さ5.7m、幅1.0m、高さ0.7mである。長さから言って、伝統的な竪穴式石室の範疇に入るかも知れない。周濠からは円筒埴輪、形象埴輪、須恵器が出土しており、須恵器はTK208型式である。

ジャマ古墳は埋没古墳であり、埋葬施設は削平されており不明である。円筒埴輪の特徴から笹塚古墳よりも後出で、亀山古墳とほぼ同じころの築造とみられる。

亀山古墳の中心の埋葬施設は、古墳出現期の高槻市・安満宮山古墳とも通底する基盤の岩盤を直に掘り込んだ石蓋土壙墓（第1埋葬施設）であり、同一墓壙内に副葬品埋納施設が検出され、豊富な鉄鏃と農工具類が埋納されていた。中心埋葬の南東の位置に斜行の関係で木蓋土壙墓（第2埋葬施設）がつくられていた。

中心の石蓋土壙墓からは、横矧板鋌留短甲、横矧板鋌留眉庇付冑と付属品としての鋌小札による草摺、籠手の一領分の武具が副葬されていた。他に、踏み返し鏡の画文帯神獸鏡や鉄製武器類が副葬されていた。木蓋土壙墓からは、横矧板鋌留短甲、鉄製武器類、珠文鏡が副葬されていた。これらの武具は当時の最新の武具であり、最新の武具を所有していた被葬者の姿を彷彿とさせる。

方墳としては、黒福1号墳がある。この古墳は埋没古墳で埋葬施設はすでに削平されて不明である。周溝は配されるが葺石は採用されていない。

玉丘古墳群では、8期で大形古墳の築造は終焉するが、9期になっても古墳は築造され続けるが、規模の大きな古墳は築造されなくなる。

9期の古墳では、北山古墳（円墳、径26m）で、丘陵上に築かれている。平地には、東長本1号墳（円墳、径17m）、東長本3号墳（円墳、13m）がある。

方墳としては、東長本2号墳（一辺16m）、芝本1号墳（一辺14m）黒福5号墳（一辺9m）、黒福4号墳（一辺7m）などが調査されている。中小の円墳、方墳はいずれも埋没古墳であり、埋葬施設は削平を受け、

その種類は判らない。

北山古墳の埋葬施設は、長さ2.0m、幅1.0mの竪穴式石室であり、中期型の竪穴式石室を採用しており、帯金具やTK47型式の須恵器が出土している。

②御着古墳群（姫路市）

御着古墳群では、古墳時代中期では播磨地域最大の前方後円墳である壇場山古墳からこの古墳群の形成が始まると捉えている。古墳時代中期の7期から8期にかけて築かれた古墳群である。

この古墳群の特質は、この地域の大首長墳は大形前方後円墳を採用しているが、有力首長墳以下の墳形が方墳であることであり、その埋葬施設が大首長墳も有力首長墳も中小首長墳いずれも長持形石棺を採用していることにある。この現象は列島の古墳の埋葬施設のあり方からみればきわめて特異な現象である。この特異な現象は、御着古墳群が大王の棺とも称されるいわゆる竜山石製の長持形石棺が集中していることは、この古墳群が長持形石棺の製作を統括していた首長層の古墳群の姿態であろうと理解しているところである。

この古墳群の現存している古墳の構成をみれば、壇場山古墳（前方後円墳、約147m）、方墳としては、播磨地域最大の方墳である山ノ越古墳（一辺約55m）、壇場山古墳の陪塚的存在である櫛ノ堂古墳（一辺、約20m）である。

かつて、周辺には藤塚、ひじり塚、経塚と呼称されている古墳が存在したと伝えるが、現在その位置は明かでない。壇場山古墳の前方部にある長持形石棺片は藤塚古墳の出土であるという伝承をもつ。この古墳群の近くには、小林地藏堂、阿弥陀地藏堂にも長持形石棺の一部が石棺仏としてのこされている。

壇場山古墳は盾形の周濠を配した三段築成の前方後円墳であり、周濠を含めた総長は約150mである。東側くびれ部に造り出しが付設されている。埋葬施設は後円部墳頂中央に長持形石棺が直葬されている。ただし、墳丘主軸との関係をみれば、玉丘古墳と異なり、墳丘主軸と直交に埋葬されている。長持形石棺直葬であることは、玉丘古墳と同じであると言える。

山ノ越古墳は幅約20m周濠を配し、周濠を含めた総長は約90mである。埋葬施設は長持形石棺直葬であり、その主軸は壇場山古墳とほぼ平行しているという関係にある。

櫛ノ堂古墳は壇場山古墳の後円部の北東の位置に隣接しており、現在、長持形石棺の短側石が現地において認められる。

5. まとめにかえて

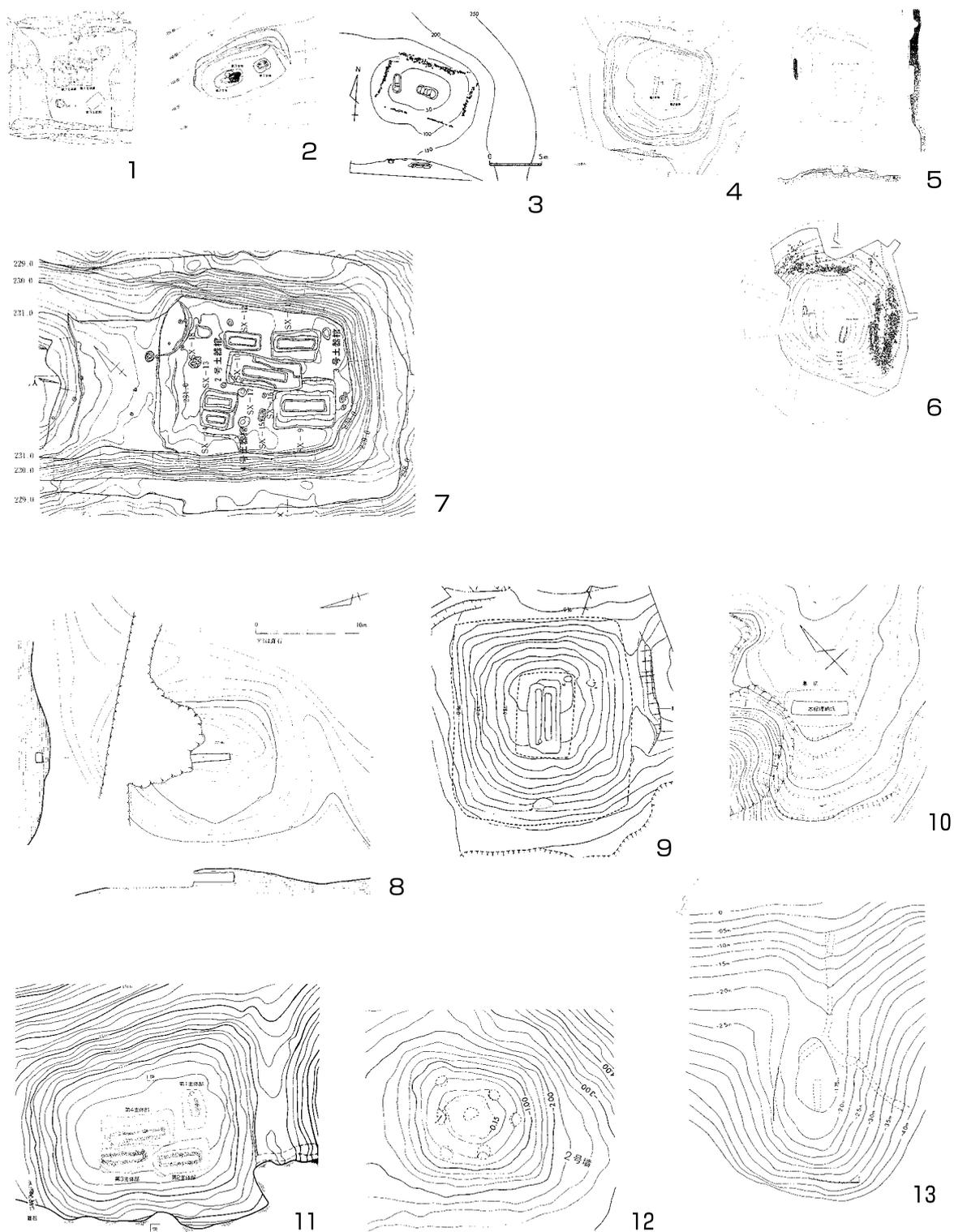
弥生時代の拠点集落が解体するまでの近畿地方の墳墓型式の主流は、方形原理に基づく方形周溝墓であった。

弥生時代の先進地域であった北部九州においても、弥生時代前期から方形基調の墳墓が発達（柳田1986）していた。この論文も衝撃的であった。

弥生時代に優位であった方形原理の墳丘墓が、いつ円形原理が優位になったのであろう。

赤穂市の原・田中遺跡の弥生時代後期中葉の1号墓は、径20mを超える当時としては大形の円形墳丘墓である。円形の周溝をめぐらせ、その東西に突出部と陸橋部を付設し、川原石を使用した貼石状の列石をもつ。中円双方墳の萌芽を示している形態である。

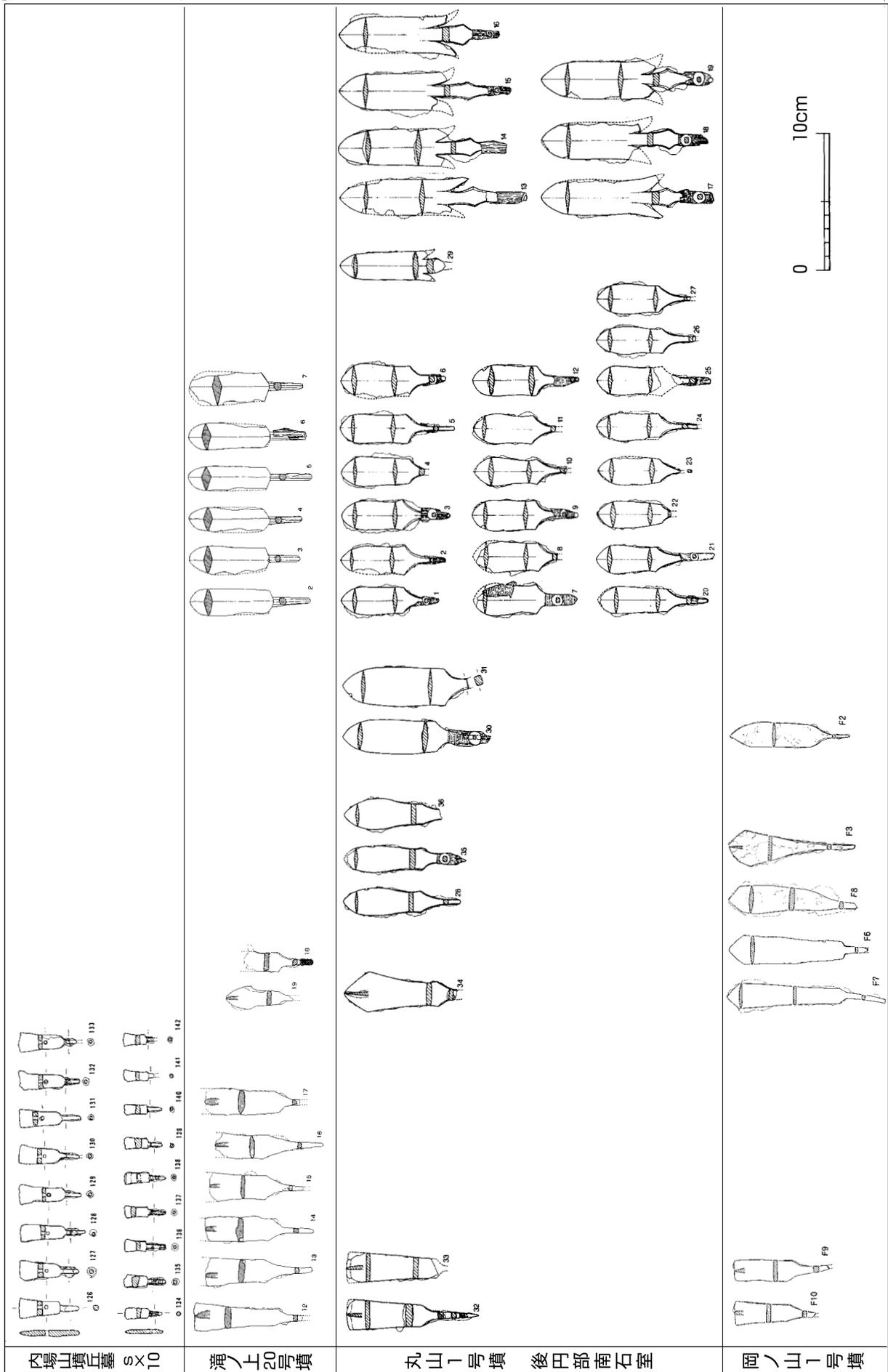
それは、播磨地域においては、弥生時代後期中頃に転換した可能性が高い。その後も、面径19.2



1. ボラ山1号墓 2. ボラ山14号墓 3. 周遍寺山1号墓 4. 経ヶ芝墳墓 5. 堀山3号墓 6. 舟木南山墳墓
 7. 内場山墳丘墓 8. 滝ノ上20号墳 9. 天王山4号墳 10. 安満宮山古墳 11. 岡ノ山1号墳 12. 丸山2号墳
 13. 権現山9号墳

0 20cm

第3図 播磨地域の方形墳



第5図 墳墓出土の鉄鍔・銅鍔の型式比較 (滝ノ上20号墳の2~7のみ銅鍔。他は鉄鍔。)

cmの大形の内行花文鏡の舶載破碎副葬鏡（山本2008）を出土した、たつの市・岩見北山1号墓は径約18mの円形積石墳丘墓であり、同じく径19.5cmの内行花文鏡の舶載破碎副葬鏡が出土した墓道のような列石を配す加古川市・西条52号墓も径約15mの円形墳丘墓であった。いずれも弥生時代後期末の築造である。

これらの諸例は、播磨地域の沿岸部に位置し、播磨地域の沿岸部においては、弥生時代後期中頃から円形原理の墳丘墓が優位であったことを示している。

しかし、一方、弥生時代後期の養久山5号墓は中方双形墳丘墓であり、中方の方形墳丘の中心に円形の配石壺棺と呼称される埋葬施設をもち、その南北方向の両側に墳丘主軸と直交する形で配石木棺墓とも呼称してよい埋葬施設が配置されていた。当初からの計画的な埋葬施設の配置と捉えることも可能で、墳丘墓のひとつの複数埋葬のあり方を示している。

弥生時代終末期の播磨地域内陸部には、舶載分割鏡や重圏文鏡を副葬した上郡町・井ノ端7号墓や佐用町・西ノ土居墳墓は方形原理の墳丘墓である。いずれも3基の埋葬施設を配置している。

井ノ端7号墓は長辺16.0m、短辺10mの長方形墳丘墓であり、四辺に列石を施している。中心埋葬に竪穴式石室ふうの埋葬施設（山本2008）を配し、その南側に併行に配された第2主体の箱形石棺から完鏡の重圏文鏡が副葬されており、北側にある第3主体から舶載分割鏡が副葬されていた。

西ノ土居墳丘墓は長辺14m、短辺7mほどの長方形墳丘墓で、一部に列石が認められる。中心埋葬の竪穴式石室ふうの主体部から管玉と鉄刀子と共に舶載分割鏡が副葬されていた。

このように観てくると、播磨地域には、ある意味で円形と方形の争いは錯綜とした状況が窺い知れるところであるが、播磨地域の沿岸部においては円形原理の弥生墳丘墓が優勢であったと言える。

一方、丹後地域は弥生時代後期前半から方形墳丘墓が発達し、方形原理の墳墓が圧倒的に優位な状況であった。出雲地域、伯耆地域を中心に山陰地方に四隅突出墳丘墓が発達した地域であり、この広範な地域も方形原理が優位な墳丘墓の社会であった。吉備地域は方形原理と円形原理の墳丘墓が錯綜としている状況は播磨地域と同じ様相が看取できるが、弥生時代後期末の楯築墳丘墓は中円双方墳丘墓で、この時期、列島最大の墳丘墓であり、円形原理が優位になった地域である。

また、大和地域の弥生時代終末期を中心とする纏向墳墓群も円形原理の墳墓が優位な社会であった。

墳長約278mの巨大な前方後円墳である箸墓古墳の築造をもって、纏向古墳群は終焉を迎える。ここに列島規模の大きな画期がある。そして、古墳時代後期まで圧倒的な円形原理の優位な社会を迎えるのである。

検討してきた播磨地域、丹波地域の方形墓、方形墳の要約をすることによって、この小論のまとめの責を果たしたい。

播磨地域の最古の方墳は滝ノ上20号墳である。方形墳と長大型の竪穴式石室の組合せである。この竪穴式石室の特徴は箱形石棺状の副室をもつことと礫棺床を採用していることにある。

副室は最古期の前方後方墳である西求女塚古墳（墳長約95m）の竪穴式石室にも付設されており、鼓形器台、鑿頭式鉄鎌が出土していることでも共通している。鑿頭式鉄鎌は、定型化した古墳出現以前の丹後・但馬・丹波地域を中心に日本海地域に分布の中心（山本2008）があり、その出現は弥生時代終末期とみられる。

礫棺床をもつ竪穴式石室は出雲の東部地域で発達する基底部の構造であり、方墳と竪穴式石室という組合せである。出雲西部地域にある最古期の古墳である神原神社古墳も方形墳と竪穴式石室の組合

せであるが、粘土棺床を採用している。神原神社古墳からは36本もの鑿頭式鉄鎌が副葬されていた。丹後地域にも方形墳と竪穴式石室の組合せをもつ古墳として、久美浜町・権現山古墳が調査されている。この組合せ古墳としては出雲地域と同じ傾向で規模が大きく、長辺50m、短辺45m、高さ6～7mである。埋葬施設は二段墓壇で墓壇中央断面U字形に掘り込み棺床としている構造で、竪穴式石室は段上に基礎をもつ構造である。棺床には「バラスの小石が敷かれ」と報告され、礫棺床と捉えてよいであろう。石室の長さ4.1m、幅0.6mである。石室石材は亜角礫を使用している。竪穴式石室の周囲には長大な割竹形木棺直葬の埋葬施設5基他が築かれていた。竪穴式石室からは遺物は出土していないが、割竹形木棺から鼓形器台等が出土している。竪穴式石室の構造や周辺埋葬の出土土器から、滝ノ上20号墳より新しい時期の構築であるのは明かである。

播磨地域で礫棺床をもつ竪穴式石室として揖保川流域の権現山9号墳があるが、小形の珠文鏡が副葬されており、滝ノ上20号墳よりは後出の古墳であろう。権現山9号墳も方形墳と竪穴式石室の組合せである。規模は滝ノ上20号墳が一辺約16mの方形墳であるに対し、権現山9号墳は長辺約15m、短辺約9mという長方形墳である。

その後、加古川中流域に中規模な方形墳と長大型の竪穴式石室の組合せをもつ古墳が築造されていく。岡ノ山1号墳、丸山2号墳である。前者は複数の竪穴式石室を築き、後者は単数である。加古川下流域では、成福寺2号墳が築かれており、成福寺2号墳は長さが3.5mと長くはない。この三者はいずれも墓壇底中央がU字形に掘り込む二段墓壇の型式で、石室の基礎は段上にある。礫棺床は認められない。岡ノ山1号墳→丸山2号墳→成福寺2号墳と編年できるであろう。

滝ノ上20号墳とこの三者が系統的に繋がるかどうか即断できない。竪穴式石室の変遷から捉えれば、丸山1号墳を介在させて理解するほうが適切である。方形墳はこの地域の伝統的な墳形を採用したのである。

加古川型方形墳という類型を設定した、三者の特徴は同質的要素が多く適切であるが、この小論では、滝ノ上20号墳や権現山9号墳もこの類型として捉えている。狭義の類型設定には三者の特徴を念頭においておくほうがよいであろう。

滝ノ上20号墳の出自を見極めたいという思いから、滝ノ上20号墳以前の加古川流域の方形墓を検討してきたが果たせなかった。しかし、副産物として、複数の箱形石棺をもつ方形墳丘墓という類型と丹後地域の影響下にある舟底形木棺をもつ可能性の高い方形墓が判明してきた。加古川中・上流域の弥生時代後期後半から終末期にかけては方形墓が優位な墳墓形式であることも明らかになった。滝ノ上20号墳を理解するときのひとつの糸口ではある。

滝ノ上20号墳から離れて、明石川流に古墳時代前期の方形墳が多く築かれており、そのあり方を検討した。検討した古墳前期の方形墳が割竹形木棺直葬を埋葬施設とする古墳ばかりであることが判り、方形墳と割竹形木棺直葬の組合せをもつ古墳を明石型方形墳と類型化した。明石型方形墳には埋葬施設を複数もつ古墳と単数の埋葬施設しか築かれていない古墳がある。複数埋葬の明石型方形墳の割竹形木棺の長さが4.0mを超える長大な割竹形木棺を採用しており、単数埋葬の明石型方形墳の割竹形木棺の長さ2.5mと2.0mという短小な割竹形木棺が使用されている。前者を明石型方形墳 a類と後者を明石型方形墳 b類と細分し、基本的に a類が古く、b類が新しいと捉えた。明石型方形墳には埴輪は採用されていないことも重要な事実である。

続いて、市川・夢前川流域の方形墓・方形墳、揖保川流域の方形墓・方形墳、千種川流域の方形墓・

方形墳を検討する予定であったが時間と紙数の制約の関係から果たせなかった。

古墳時代中期の方墳をめぐるでは、播磨地域の大型古墳群の玉丘古墳群と御着古墳群の中の方墳のあり方を検討した。両古墳群は方墳の存在形態が異なり、御着古墳群では播磨地域最大の方墳の山ノ越古墳が築かれ、一辺20mの方墳の櫛ノ堂古墳でも竜山石製の長持形石棺を埋葬施設とする方墳である。玉丘古墳群の埋没古墳の小形方墳が多く、最下位の首長に採用されている古墳群である。方墳から透視すれば、大形前方後円墳のみを比較していたときとは違った風景がみえてきた。

しかし、須恵器が導入されてからの中期後半以降の方墳の諸例の検討も果たせていない。造り出し付方墳の加古川市・東沢1号墳、三角板革綴短甲を副葬していた割竹形木棺直葬の長方形墳の三木市・年ノ神6号墳、長原遺跡を小規模にしたとも捉えられる埋没古墳の小形方墳が群集していた三木市・高木古墳群、古式の横穴式石室をもつ、たつの市・タイ山古墳群などの諸例である。後日に期したいと想う。

最後に、本文の中でも度々ふれているところであるが、まとめにかえての中に入れた挿図の目的を記しておきたい。

第5図の鉄鍬と銅鍬の型式をみれば、丸山1号墳より滝ノ上20号墳が先行し、内場山墳丘墓より後出であることが明かであろう。そして、この加古川中流域が鑿頭式鉄鍬の伝統が方形墳と共に強いことが判るであろう。古墳前期後半の岡ノ山1号墳まで続いている。丸山1号墳に柳葉式鉄鍬は堅穴式石室と共に初期ヤマト政権の関係で築造された前方後円墳であることを示していると捉えている。

第4図はこの地域の長大型の範疇に捉えてよい堅穴式石室の変遷図である。滝ノ上20号墳と丸山1号墳の堅穴式石室の構造の違いが明確であろう。

第3図は墳形と埋葬施設を集成したもので本文の中で度々触れている。

この小論は滝ノ上20号墳の検討から始めている。滝ノ上20号墳に先行する内場山墳丘墓、ほぼ同時期の西求女塚古墳、この三者は丹後地域との関連で捉えることができると思考している。今後の検討がさらに必要だが、丹後の王墓の往還の姿が内場山墳丘墓や西求女塚古墳の被葬者の実相とみたい。

(註)

1. 畿内という用語を使用について、畿内制という文献の成果を重視しなければならないことは充分承知しているが、古墳時代前期の前方後円墳と堅穴式石室のあり方を論じた(山本1980・1983)で示したように、奈良県東南部にある大倭古墳群という中心が形成された時代に、河内地域では玉手山古墳群が、山城地域では向日町古墳群が、摂津地域には弁天山古墳群が成立している。このことは畿内制の萌芽が古墳時代前期に形作られている可能性があるのではと考えている。ただし、畿内とは記さずに畿内地域と表現しているのはそのことの配慮である。奈良時代に河内から分割される和泉の地域は古墳時代前期後半から前方後円墳が築造されるのだが。

なお、吉備地域や加古川流域の前方後円墳には、畿内様式とも呼称してもよい整備な長大型堅穴式石室の採用には、30~50m前後の前方後円墳にも採用されている。このことは、大倭古墳群の成立に重要な役割をもって参画した吉備地域の影響が大なるものであることを思考しなければならないことが重要であると捉えている。このことは別稿で果たしたと想っている。

2. 報告書の第4図20号墳墳丘測量図の葺石の状態をみれば二段築成の方形墳にも捉えられなくもないが、72.25mのコンタラインが方形に一周しており、報告者はこれを墳丘基底と捉えている。一応報告書に従った。

3. この古墳の発見当初の1967(昭和42)年10月には、「断面に空洞を有する箱形石棺状のもの」を確認している。が、その後、関係機関と協議を重ね、発掘調査が開始された同年12月24日には、この箱形石棺状の副室は崩壊していたのである。そして、副室構築に使用された板石が写真図版に掲載されている。

4. 清家2001論文では、箱形石棺の規模や石棺の各部分の特徴を捉えて、それぞれにタイプ分けを行っており、長側石1枚タイプ、幅広タイプ、有底石タイプを採用する箱形石棺は階層の上位と捉えているが、箱形石棺同士の各部分の特徴の比較からは有効であるが、石棺総体のタイプの組合せのもとで類型化を行う必要を感じている。そのときは墳形、その規模等も加味していく必要があるであろう。
5. 小形石棺の被葬者が、有力な首長の世子という考え方が可能かどうか、ボラ山14号墓の同一墳丘墓内の基準タイプの石棺が長側石複数タイプであることと階層制の有無を論じるに合致しない。このことは、清家氏の論理が、弥生時代終末期には多様な墳丘墓が、多様な埋葬施設の種類を採用しており、その適用が難しいところの問題であるかも知れない。古墳時代前期それも後半以降になってから顕現する論理とした方が整合性をもつのではといったところは、今後の検討課題であろう。
6. 墳丘規模の捉え方が混乱している。赤松1958では「表面的な観察では、東西12m、南北9m、高さ2mほどのやや長円形で葺石のある古墳」と記述されており、発掘調査成果では、「長方形石垣のある方形墳であった」とされ、その「長方形石垣は東西9.5m、南北6.0mほど」であったと報告されている。清家2001では前者の数値を、石野1985では後者の数値を墳丘規模と把握されている。立花2001では複雑な解釈をし、「墳丘基底は東西約12.6m、南北約8.0mの方形を呈し」、「墳丘裾には東西長約9.5m、南北長約6.0m、高さ約0.3mの列石が検出されている」という記述である。そして、石野氏の指摘する四隅突出墳丘墓の可能性が低いと把握されている。

拙稿では、赤松1958に従い、列石が墳丘基底を明確にするものと捉え、9.5m×6.0mの長方形の形状と規模であると捉えている。
7. 前方後円墳の記述の仕方では、『前方後円墳集成』に従い、墳丘の全長を墳長、周濠を含めた規模を総長と記述している。総長という呼称は円墳や方墳にも適用している。

(引用・参考文献)

- 青垣町・氷上郡教育委員会 1995『ブラ山・ボラ山』氷上郡埋蔵文化財調査報告書第2集
- 赤松啓介 1958『加西郡加西町周遍寺山古墳群発掘調査概報』
- 赤穂市教育委員会 1991『有年原・田中遺跡』
- 石崎善久 2000「弥生墳墓の構造と変遷－舟底形木棺を中心として－」『季刊考古学・別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』
- 池淵俊一 2002「神原神社古墳出土の鑿頭式鉄鏃に関する試論」『神原神社古墳』鳥根県加茂町教育委員会
- 石野博信 1985「播磨の中の出雲と筑紫」『兵庫史の研究－松岡秀夫傘寿記念論文集－』
- 揖保川町教育委員会 1985『養久山墳墓群』（近藤義郎編）
- 梅原末治 1932「富合村玉丘古墳」『兵庫史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9輯
- 大塚初重 2009「東国の中期大型方墳の問題－甲斐・龍塚古墳をめぐる－」『東アジアの古代文化』137号（最終号）
- 岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
- 加西市教育委員会 1990『玉丘古墳』
- 加西市教育委員会 1992『玉丘遺跡群－ジヤマ古墳・城ノ内遺跡発掘調査概要報告書－』
- 加西市教育委員会 1993『玉丘遺跡群Ⅱ－マンジュウ古墳・小山古墳・黒福古墳群発掘調査概要報告書－』
- 加西市教育委員会 2005『玉丘古墳群Ⅰ－亀山古墳－』
- 加西市教育委員会 2006『玉丘古墳群Ⅱ－亀山古墳2・笹塚古墳－』
- 加西市教育委員会 2007『玉丘古墳群Ⅲ－マンジュウ古墳－』
- 加茂町教育委員会 2002『神原神社古墳』
- 岸本一郎 2003「滝ノ上古墳群」（西脇市教育委員会編『西脇市古墳調査集報』）
- 岸本一郎 2003「経ヶ芝古墳」（西脇市教育委員会編『西脇市古墳調査集報』）
- 岸本直文 1997「小野市の考古資料」『小野市史』第4巻
- 岸本道昭 1996「第4章新宮東山古墳群の研究」『新宮東山古墳群』龍野市文化財調査報告16
- 喜谷美宣 1990「原始・古代の神戸」『新修神戸市史歴史編Ⅰ』

- 久美浜町教育委員会 1984『権現山古墳発掘調査概報』京都府久美浜町文化財調査報告第9集
- 神戸市市史編さん委員会 1990「神戸の遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ』
- 神戸市教育委員会 2004『西求女塚古墳発掘調査報告書』
- 是川 長 1972「附載2 播磨地方の方形墳について」『中国高速道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』（兵庫県文化財調査報告第7冊）
- 清家 清 2001『古墳時代前・中期における埋葬人骨と親族関係』科学研究費補助金（奨励A）研究成果報告書
- 佐原真 1970「大和川と淀川」『古代の日本』第5巻
- 山南町 1977『兵庫県氷上郡山南町・丸山古墳群－調査の概要－』
- 立花聡 2001「加西・周遍寺山1号墳の再検討」『ひょうご考古』第7号
- 種定淳介 1989「加古川・由良川－モノの移動について－」『横山浩一先生退官記念論集 生産と流通の考古学』
- 瀬戸谷皓 2003「豊岡市深谷2号墳の再検討」『古代近畿と物流の考古学』
- 平良泰久 1992「方墳」『季刊考古学』第40号
- 田中勝弘 1980「方墳の性格－特に、近畿地方における中期方墳について－」『古代文化』第32巻第8号
- 田中勝弘 2003「前方後方墳と方墳」『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 都出比呂志 1986『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学国史研究室
- 都出比呂志 1981「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室
- 都出比呂志 1992「2古墳の墳丘 1墳丘の型式」『古墳時代の研究 第7巻 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』雄山閣
- 寺前直人 2008「五世紀の大和政権（倭王権）と北摂－小古墳の被葬者たち－」『つどい』第247号（豊中歴史同好会）
- 西川 宏 1959「方墳の性格と諸問題」『私たちの考古学』第5巻3号
- 西川 宏 1961「陪塚論序説」『考古学研究』第8巻第2号
- 野島永・野々口陽子 1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号
- 野島永・野々口陽子 1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2)」『京都府埋蔵文化財情報』第76号
- 広瀬 覚 2008「葺石の成立・展開と地域交流」和田晴吾先生還暦記念論集刊行会)
- 兵庫県教育委員会 1993『内場山城跡』兵庫県文化財調査報告第126冊
- 兵庫県教育委員会 2006『加西市南産業団地内遺跡調査報告書』兵庫県文化財調査報告第302冊
- 三好博喜 2008「前方後方形周溝墓から大型古墳への系譜」『吾々の考古学』（和田晴吾先生還暦記念論集刊行会）
- 柳田康雄 1986「北部九州の古墳時代」『日本の古代5 前方後円墳の世紀』中央公論社
- 山田幸弘 1997「第6節 西墓山古墳の築造企画について」『西墓山古墳－古市古墳群の調査研究報告Ⅲ－』（藤井寺市文化財報告第16集）
- 山田幸弘 1997「第7節 畿内における陪塚について」『西墓山古墳－古市古墳群の調査研究報告Ⅲ－』（藤井寺市文化財報告第16集）
- 山本三郎 1980「畿内における古墳時代前期の政治動向についての一視点＝埋葬施設」の構造を中心として－」『ヒストリア』第87号、大阪歴史学会
- 山本三郎 1983「畿内地域における前期古墳の複数埋葬について」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念・考古学論叢』関西大学考古学研究室
- 山本三郎ほか 1984「揖保郡御津町権現山8・9号墳」『兵庫考古』第20号
- 山本三郎 1992「竪穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』第7巻、雄山閣
- 山本三郎 2008「タニワ（兵庫）の長刀と墳墓」『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』資料集（ふたがみ邪馬台国シンポジウム）
- 山本三郎 2008「播磨地域における弥生時代遺跡・出土鏡の検討」（菅谷文則編『王権と武器と信仰』）同成社
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第24巻第2号
- 和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』（都出比呂志編『古代史復元』第6巻）講談社
- 和田晴吾 1995「棺と古墳祭祀－『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』」『立命館文学』第542号